

最後の日々

(プーシキン)

ミハイール・ブルガーコフ 作

能美 武功 訳

城 田 俊 監修

「ああ、私の手になる詩歌よ、

運命の手に守られて、お前は、

黄泉の国の物忘れ川の川底に、沈まずにすむだろうか。」

登場人物

プーシキナ (ナターリヤ・ニカライエヴナ)      プーシキ

ン夫人

ガンチャローヴァ (アリエクサードウラ・ニカライエヴ

ナ)      プーシキナの姉

ヴァランツォーヴァ (アリエクサードウラ・キリーロヴナ)

サルトウイコーヴァ (アリエクサードウラ・スエルゲーイ

ヴナ)      サルトウイコーフ夫人

駅長の妻

女中

ピトウコーフ

ニキータ

ダンテース (ジオルジュ・シャールリ)

シーシキン (アリエクスエイ・ピエトウローフ)

ベネディークトフ (ヴラチーミル・グリゴリーエヴィッチ)

クーカリニツク (ニエストール・ヴァスィーリエヴィッチ)

ダルガルコフ (ピョートル・ヴラチーミラヴィッチ)

バガマーゾフ (イヴァーン・ヴァルファラミエイエヴィッ

チ)

サルトウイコーフ (スエルゲーイ・ヴァスィーリエヴィッチ)

ニカライー世

ジュコフスキー (ヴァスィーリイ・アンドウリエーイエヴィッ

チ)

ゲツケレン

ドゥービエリト (レオントウイ・ヴァスィーリエヴィッチ)

ベンケンドールフ

ラケーイエフ

パナマリョーフ

ストウローガノフ

ダンザース (カンスタンチーン・カールラヴィッチ)

ダーリ

学生

士官

駅長

トゥルゲーニエフ

ヴァランツォーフ

フィラートウ

アガフオーン

近衛士官一

近衛士官二

黒人

士官候補生

ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィッチ

下男

警官

憲兵の団

警察

学生の群

群衆

時 一八三七年一月下旬、と、二月月上旬

### 第一幕

(夜。ペテルブルグの、アリエクサードウル・スエルゲイ  
イェヴィツチ・プーシキンのアパートの客間。隅の方に大き  
なオルゴール時計。その傍に数本の蠟燭。古びた豎型ピアノ。  
その上にも二本の蠟燭。開いている扉から、隣の書斎の暖炉  
と本棚の一部が見える。書斎、客間、両方の暖炉で石炭が燃  
えている。)

(ガンチャローヴァ アリエクサードウラ・ニカライエ  
ヴナ・ガンチャローヴァ が、ピアノを前にして坐つてい  
る。時計職人のピトウコフが修理道具を持って時計の傍に  
立っている。ピトウコフが時計をいじくる度に、時を打つ  
たり、オルゴールが鳴ったりする。ガンチャローヴァ、静か  
にピアノを弾き、歌を口ずさむ。窓の外は嵐。)

ガンチャローヴァ (口ずさむ。)

「悲しく、そして暗く……どうしたの、おばあさん、

じつと黙つて窓の傍で……

嵐を呼ぶ不吉な雲が、低く空を覆っている。

嵐で吹きだまつた雪を、つむじ風が、

今度は丸く集める。

ひゅうひゅう言う、嵐の声。

時には獣のように唸(うな)り、また時には、

子供のすすり泣きのようにかほそく泣く。

ピトウコフ なんて素晴らしい唄なんだ！ プラチエーシ

ヌイ橋のお屋敷でも直しがあつて、私は行ったんですがね……

橋を渡つて……。雪のやつ、ブルブル、クルクル回つて回つ

て……目と言わず、口と言わず……(間。)どなたなん

でしょう、こんな素敵な詩を作つた人は。

ガンチャローヴァ アリエクサードウル・スエルゲイエ

ヴィツチ・プーシキン。

ピトウコフ へえー、プーシキン！ 実につまいですね。

煙突で泣いている。子供のよう。本当にそつだもの。神業

だな。

(玄関のベルがなる。ニキータ登場。)

ニキータ ガンチャローヴァ様、シーシキン中佐という人

です。お会いになりたいと。

ガンチャローヴァ シーシキンて？

ニキータ ええ。シーシキン。中佐の。

ガンチャローヴァ こんなに遅く、どういふこと？ 会わ

ないって、そう言つて。

ニキータ お会いにならないなんて、そんな ガンチャロー

ヴァ様。

ガンチャローヴァ あら、思い出したわ。あの人ね。大変！  
お通しして。

ニキータ 畏まりました。（扉へ進みながら。）ああ、どうなるんだろう・・・ああ、破産だ・・・（退場）  
（間）

シーシキン（登場して。）失礼をいたしますよ。眼鏡が湯気で曇って、どうも・・・どうか、お見知りおきを。私は、退役中佐、アリエクスイー・ピエトウロフ・シーシキンと申します。こんな時刻に参りまして、どうかお許しを。それにしても酷い天気で。これじゃ飼犬を外に出してやることも出来ません。にっちもさっちも行きませんです、本当に。あなた様は？ どなた様でしょうか。

ガンチャローヴァ ナターリヤ・ニカライエヴナの・・・えー、プーシキン夫人の姉ですわ。

シーシキン ああ、お噂は伺っております。お会い出来て光栄です、マドウムワゼツル。

ガンチャローヴァ *Veuillez-vous s'asseoir, monsieur.* （仏語 どうぞ、お坐り下さい。）

シーシキン パルレ・リュッス・マドウムワゼツル。（どうぞ、ロシア語で。）では、失礼して。（坐る。）お天気の話でしたね。

ガンチャローヴァ ええ。吹雪ですわ。

シーシキン この御主人にお会いしたいのですが。

ガンチャローヴァ 申し訳ありませんけど、アリエクサーンドウル・スエルゲーイエヴィツチは今、外出中で・・・

シーシキン では、奥様は？

ガンチャローヴァ ナターリヤ・ニカライエヴナも。お言葉で。

シーシキン ああ、これは間の悪い。ついていません、私は。しかし、今日には限りません。何時だつて掴まらないんです、あの方は。

ガンチャローヴァ ご心配なく。貴方様からの御伝言、必ず伝えますわ、兄に。

シーシキン いえ、この件は直接あの方にお話した方が・・・あ、分かりました、分かりました。簡単なことなんですから。この御主人に私は何度となくお金を御都合致しました。その形（かた）にトルコ製のシヨール、宝石類、銀製の食器など戴いておりますが、それが現在締めて一万二千五百ルーブリにもなりますので。

ガンチャローヴァ ええ、存じておりますわ・・・

シーシキン 一万二千五百ルーブリ・・・容易な金額じゃありませんからな。

ガンチャローヴァ それでもう御猶予をお願いする訳にはまいらないと？

シーシキン 喜んで御猶予を差し上げたいところなのです、マドウムワゼツル。イエス・キリストも、辛抱強くあれと私達に教えて下さっています。でも、私どもの窮状もお察し下さい。私どもも食べて行かねばならないのです。それに海軍に勤めている息子達、彼らに仕送りをしてやらねばなりません。今日参りましたのは、ですから、借金（かた）にお預かりしている品を明日売りに出しますと、お知らせする為なのです。丁度適当な人物が見つかったのです。ペルシヤ人の金

持ちが。

ガンチャローヴァ それはどうか、どうか、お待ちになつて。プーシキンは、必ず利息を払いますから。

シーシキン それが・・・もう限度なのです。十一月から御猶予申し上げて・・・他の人間ならもうとうに売り飛ばしている頃です。私もこのペルシヤ人を失いたくないのです。国に帰ってしまうかも知れませんが、絶好の機会を逃したくないのです。

ガンチャローヴァ 私、ネックレスがありますわ。それに銀の食器も。ちよつと見て戴けませんか？

シーシキン 失礼ながら、銀器などではとても。それに、このペルシヤ人は・・・

ガンチャローヴァ どうか、お願いですわ。だつて物がなければ、お宅様だつてどうしようもないじゃありませんか。見るだけでも。私の部屋に、どうか。

シーシキン そうですか。それではまあ・・・（ガンチャローヴァの後に続く。）立派なお住まいですな。これはどのくらいなんでしょう、家賃は。

ガンチャローヴァ 四千三百。  
シーシキン ちと高うございますな。（ガンチャローヴァと隣の部屋に退場。）

（一人残つてビトゥコーフ、聞き耳を立てる。蠟燭を持ってピアノに近づき楽譜を覗きこむ。それから少し躊躇つた後、書齋に入る。本の背表紙を読み、驚いて十字を切り、書齋の奥に退場。暫くして帰つて来て、自分の元の場所、修理中の時計に戻る。ガンチャローヴァ登場。その後シーシキン。

手に小さな包みを持つている。）

ガンチャローヴァ 申し伝えますわ。

シーシキン そうですね、私の方も手形をお送りすることに致します。でも、とにかくあなたの方に、こちらにお越し戴くようお伝え下さい。辻馬車がおそろしく高いのです、最近。イズマリーロフスキー通り、四番。バルシチョーフ・ビルディング。小さい窓の部屋・・・あなたの方、ご存じですから・・・（扉のところへ。）オルヴワール、マドゥムワゼッル。

ガンチャローヴァ Au revoir, monsieur.  
（シーシキン退場。）

ビトゥコーフ（時計の蓋を閉じ、修理道具を鞆に仕舞つ。）直りました。動いていますから。で、書齋の方は・・・ええ、明日寄つてみます。

ガンチャローヴァ 有り難う。明日また。

ビトゥコーフ ではこれで。失礼致します。（退場。）  
（ガンチャローヴァ、暖炉の傍に坐る。扉のところへニキータ登場。）

ニキータ ああ、ガンチャローヴァ様！

ガンチャローヴァ なあに、ニキータ。

ニキータ ああ、大切な・・・（間。）大切なあの首飾りもお手放しになつて・・・

ガンチャローヴァ 買い戻すわ。

ニキータ いいえ。買い戻すための品物など、もうどこにも。買い戻すなんて、もう・・・

ガンチャローヴァ 今日はお前、えらいガーガーと私にあたるわね。

二キータ ガーガーなどとてもない。私は鷺鳥ではありませぬ。酒屋のラウルに四百ルーブリ。ラフィット（葡萄酒の名）の代金。ああ、考えても恐ろしくなります。馬車屋に、薬屋に・・・それに木曜日にはカラドウィキンに書き物機の借賃、その他、請求書、請求書、請求書。書類で請求が来るのならまだしも、牛乳屋にまで借りがあつて残るもの情けないことに。少々お金が入つて来たつて、手元に残るものなんて何もありません。全部借金の支払い。ガンチャローヴァ様、どうか御主人に申し上げて下さい。もう田舎に帰りましょう、と。こんな大都会、セント・ペテルスブルクにいたつて、何の良きことありません。以前にも申し上げました。お子様方もお連れになるんです。静かで、広いです。気持ちがつつたりします、田舎は・・・こんな都会なんて、全く穴倉です、ガンチャローヴァ様。物価も田舎の三倍じゃありませんか、ここは。三倍ですよ。それに御主人様のお顔の色。いえ、他のお方もお疲れで黄ばんでいます。よくお眠りになれないのです・・・

ガンチャローヴァ お前、自分で言つたね、あの方に。二キータ 何度も申し上げています。その度にお答えになるので。「煩いね、お前は。うんざりするよ、その話は。そつでなくても私の頭は嵐で荒れ狂つているんだ。」そつ、三十年もお仕えしましたからね。うんざりなさるのも仕方ありません。

ガンチャローヴァ じゃ、奥様にお話さない、それなら。二キータ しても何にもなりません。いらつしやらないにきまつていますから。（間。）そつか、奥様なしなら・・・

あなた様と、御主人様と、それからお子様方だけで・・・ガンチャローヴァ どうしたの、二キータ。お前、頭がどつかしたんじゃないのかい？

二キータ 田舎にお帰りになればいいんです。朝はピストルの練習、そしてその後、乗馬・・・お子様方はゆつたりした、住み心地のよい生活・・・

ガンチャローヴァ 止めて。うるさいわね、二キータ。もうあつちへ行つて。

（二キータ退場。ガンチャローヴァも暖炉の傍に少し坐つた後、奥の部屋に退場。玄関の鈴の音。二キータ、玄関から直接に（即ち、客間を通らず）暗い儘の書齋に入つて行くのが見える。そしてその後ろに誰か（訳注 即ちプーシキン）がちらりと見え、これも書齋の奥へと入つて行く。その後、書齋に灯がつく。）

二キータ（やつと聞こえる声で。書齋の奥で。）畏まりました。はい、旦那様。（客間に登場。）ガンチャローヴァ様、旦那様がお帰りになりました。お悪いご様子です。お呼びになつていらつしやいます。

ガンチャローヴァ（登場。）そつ。今行くわ。（二キータ、食堂の方に退場。）

ガンチャローヴァ（書齋の扉を叩いて。）On enter?（入つてもいいですか？）（書齋に入る。微かにガンチャローヴァの声が聞こえる。）Alexandre, êtes-vous indisposé?（プーシキン、あなた、具合がお悪いの？）ほら、寝ていらして。ね？

お医者様をお呼びしましょうか？（客間に戻つて来る。二キータを呼ぶ。二キータ、手にカップを持って登場。）旦那

様のお召し換えを。(暖炉に身を寄せて、済むのを待つ。)

(ニキータ、書齋に暫くいて、玄關の方に出て来る。後ろ手に扉を閉める。)

ガンチャローヴァ (書齋に入る。やっと聞こえる声で。)

大丈夫・・・ええ、ええ。本当に・・・

(玄關の鈴の音。ニキータ、客間に登場。ガンチャローヴァ、すぐにニキータの後を追って登場。)

ニキータ (手紙を渡しながら。) 旦那様宛の・・・

ガンチャローヴァ (みなまで言わず、ニキータに人指し指で、脅すように振り、手紙をひったくって。) あ、仕立屋からね。分かったわ。明日お昼に出向くと言っておいて頂戴。

何をぼさっと立っているの。早くなさい。(小さな声で。)

前から言っているでしょう。旦那様に渡してはいけないうて。

(ニキータ退場。ガンチャローヴァ、書齋に退場。)

ガンチャローヴァ (書齋から。やっと聞きとれる声で。)

何を言ってるらっしゃるの。本当ですわ。仕立屋からでしたの。いけないわ、これは、アリエクサーンドゥル。お医者様を呼ばないと。そつだわ。私、あなたのためにお祈りを・・・えっ？

・・・ああ、そうですの？・・・でもどうか心配なさらないで。

(書齋の灯、消える。ガンチャローヴァ、客間に戻る。書齋に通じる扉を閉め、そのカーテンを引く。)

ガンチャローヴァ (手紙を読む。それを素早く隠す。)

やぐざな人達。なんてしつこいんでしょう。厭なこと！(間の後。)

(田舎に帰るのが一番、ニキータの言う通りだわ。)

(ノックの音。ニキータの玄關に出迎える声。)

とれる声で。)

プーシキナ登場。帽子の紐を解き、ピアノの上に帽子を投げる。近視のように目を細めて見る。)

プーシキナ まだ寐ていなかったの？ 一人？ あの人は？

もう帰ってる？

ガンチャローヴァ お帰りよ。ひどい熱。寐てらっしゃるわ。起こさないでくれって。

プーシキナ 可哀相に。でも無理もないわ。あの雪。あの風。顔の正面から鞭でたたいてくる・・・

ガンチャローヴァ 誰？ 一緒に帰って来た人？

プーシキナ ダンテースよ。送って来てくれたの。何？

その顔。

ガンチャローヴァ また面倒事を引き起こそうって言うのね、あなた。

プーシキナ お願ひ。お説教は止めて。

ガンチャローヴァ ナターリヤ、自分でやっていること、

分かっているの？ 「不幸へ一直線」。あなたのやっていること、これよ。

プーシキナ まあま、なんて大袈裟な。どこが悪いって言うの？

ダンテース、あれは従兄弟(いとこ)よ、私の。送って貰ってどこがいけないの。

(ガンチャローヴァ、プーシキナに手紙を渡す。)

プーシキナ (読む。囁き声で。)

あの人、これを読んだの？

ガンチャローヴァ とんでもない。でも、ニキータが渡すところだったわ。

プーシキナ (手紙を見て。)

ああ、馬鹿な人達！(暖炉に手紙を投げ込む。)

恥知らず！ 誰なのかしら、こんなこと

をするのは。

ガンチャローヴァ どうしても駄目ね。いくら焼き捨てたつて、また来るわ。いつかはあの人、見ることになるわ。

プーシキナ 署名のない手紙に私が責任ある訳ないでしょう？ あの人だって、そんなもの信じはしないわ。

ガンチャローヴァ どうしてそんな囁き声で話すの？ 盗み聞きなど、誰もしていないわ。

プーシキナ 分かった、分かった。白状するわ。私、イダーリヤで遇ったわ、あの人と。でも会ったんじゃない。出遇ったの。あそこにいるなんて、思ってもいなかった。偶然なよ、出遇ったのは。

ガンチャローヴァ ナターリヤ、田舎に帰りましょう。

プーシキナ ここから逃げるの？ そして田舎に隠れる？ 何のため？ 馬鹿な男達の中傷のため？ 匿名の手紙のため？

私とあの人とは何の関係もないのよ。それなのに・・・何の罪もないのに、このペテルスブルグを捨てて言うの？ ごめんだわ。田舎で気違いになりたくはありませんからね。

ガンチャローヴァ あなた、ダンテースに会うのはいけないわ。会っては駄目、決して。あの人にとってそれがどんなに辛いことか、あなた、分かるでしょう？ それにお金のこともある。随分苦しいのよ。

プーシキナ 私にどうしろって言うの、あなた。ここは都会なの。都会に住めばお金がかかるわ。ものいりがあるの。

ガンチャローヴァ 何を言ってるの、あなた。

プーシキナ そんなに怒らないの、アリエクサンドウラ。

もう寐なさい。

ガンチャローヴァ お休みなさい。(退場)

(一人になりプーシキナ、にやにやと笑う。明らかに思い出し笑い。食堂に通じる扉から、音もなくダンテース登場。頭には兜。軍用外套を着ている。それに雪。両手に女性用の手袋を持っている。)

プーシキナ(囁き声で。)何？ これ。どういうこと、他人の家に厚かましく。出て行って！ 今すぐ！ 恥知らず！ さ、早く！ 私は命令しているんですよ！

ダンテース(酷いフランス語訛りのロシア語で。)櫛に手袋をお忘れになったのです。明日、お手が凍えてはいけません。それで戻って来たのです。(手袋をピアノの上に置く。片手を兜の縁にあて、敬礼をし、出て行くことと回れ右をしかける。)

プーシキナ あなたは私を大変な危険に晒しているのよ。それが分からないの？ あの扉の後ろには居るのよ、あの人。(書斎の扉に駆け寄り、中の様子を耳で窺う。)一体何を考えていたの、ここに入って来る時。もしあの人がこの部屋にいたら？ あなたを入れてはいけないとあの人、固く止めているのよ。死よ、あなたを待っているのは。死なのよ。

ダンテース *Chaque instant de la vie est un pas vers la mort.*  
(生の一瞬一瞬が、死への一歩一歩だ。) 召使に聞いた。寝てるって話だったからな。

プーシキナ あの人、容赦しない。私、殺されるわ。

ダンテース アフリカ人の血が流れている、あいつには。それも最も残忍なやつだ。いや、心配することはない。あい

つが殺すのはこの私だ。君じゃない。

プーシキナ ああ、私、目が見えない。どうなったの、これ！

ダンテース 落ちついて。君には何も起こりはしない。私にだ、起こるのは。撃ち倒された私の体が、無造作に武器運搬車に放りこまれ、墓地に運ばれるのさ。そして吹雪。しかし世の中は何も変わりはない。

プーシキナ ここを出て。今すぐ。あなたの大切なもの全てに賭けて。お願い。

ダンテース 私に大切なもの、それはあなただ。あなたに賭けているんだ。出て行く訳には行かない。

プーシキナ お願い。どうか。

ダンテース いや、行かない。私のこの狂気、その責任は全てあなたにあるのです。あなたは私の言うことを全く聞いてくれない。しかし大事なことがあるんだ。大事なこと、これ以上大事なことはない、大事なこと。聴いて！（外を指差して。）あっちだ・・・分かるね？ 外国。ただ一言、あなたからのただ一言。どうかそれを。そして逃げよう、ここを。

プーシキナ それを言っているのは一体どなた？ あなたはたったひとつき前、イエカチエリーナと結婚した身よ。私の姉とよ。悪いのはあなた。罪人よ。気違いよ、あなたは！ そんな行為は、男爵、誉れにも何にもなりはしないわ。

ダンテース 私は結婚した。あなたを求めて。あなたに近づける、ただそれだけの理由で。そう。私は罪人だ。逃げよう、ここを。

プーシキナ 子供がいるわ、私には。

ダンテース 忘れるんだ、そんなもの。

プーシキナ ああ、それは駄目。

ダンテース 私はあそこに入るぞ。彼と会うんだ。

プーシキナ 止めて！ お願い！ 破滅よ、私の。あなた、そうやって欲しいの？

（ダンテース、プーシキナにキス。）

プーシキナ ああ、辛い。拷問だわ、これは。私の人生に、何故、何故、あなたが現れてきたんでしょう。そう、あなたのせい。あなたのせいで私、いつもおどおどしていきやならない。いつも嘘をついていきやならない。夜に安眠がない、昼に安眠がない・・・

（時計が時刻を打つ。）

プーシキナ まあ、大変。行って。お願い！

ダンテース イダーリヤにもう一度来て。頼む。もう一度。はどうしても話さなければ。

プーシキナ 明日、ブイームニイ・サードウで、バラントゥオーヴァ家の舞踏会があるわ。その時に来て、私の方に。

（ダンテース、回れ右をし、退場。）

プーシキナ（耳をすます。）言いつけるかしら、ニキータ。いいえ、決して言いつけたりしない、ニキータは。（窓に近づき、外を見る。）ああ、疚（やま）しい。心が重い。（それから、書斎の扉に進み、耳を扉に近づける。）眠っている。（十字を切る。蝋燭の火を吹き消す。隣の部屋に退場。）

（闇。その闇が晴れると、冬の日。スエルグレイ・ヴァスイー



リエヴィッチ・サルトウイコーフのアパートの居間。隣に図書室。沢山の本。図書室から客間の一部が見える。居間には朝食の用意がしてある。フィラートウが扉の傍に立っている。(クーカリニツク、サルトウイコーヴァ様、こちら、この国の最大の詩人、ヴラヂーミル・グリゴリーエヴィッチ・ベネヂークトフさんです。全く稀に見る才能、稀に見る輝きなのです。)

ベネヂークトフ ああ、クーカリニツクさん。そのような褒め言葉は……

クーカリニツク ああ、お子様方、あなた方もこの私を支持して下さい。あなた方も、この方の作品を高く評価していらっしゃるのでしょうか？

(サルトウイコーフの二人の息子……二人とも、近衛第一師団の士官……微笑んでいる。)

サルトウイコーヴァ *Enchanteé de vous voir.* (始めまして。)

お目にかかれて光栄ですわ、ベネヂークトフさん。夫もこの国の、文学をなさる方々に、大変好意を持っておりますの。

(ベネヂークトフは公務員の制服を着ている。腰の低い男。その後ろから侯爵ピョートル・ヴラヂーミラヴィッチ・ダルガルコーフが、握手のため手をのばす。侯爵はびっこ。)

サルトウイコーヴァ まあ、ダルガルコーフ侯爵、お目にかかれて嬉しいわ。

(この時、イヴァーン・ヴァルフアラミエーイエヴィッチ・バガマーゾフ登場。)

バガマーゾフ サルトウイコーヴァ様(と呼びかけて近づき、手にキス。)御主人、サルトウイコーフ公爵様はまだお見えてないようですが……

サルトウイコーヴァ すぐ参りますわ。どうぞお許し下さい。また本屋ですわ、きつと。本屋に行くと、すぐ長くなるんですの。

バガマーゾフ(ダルガルコーフに。)今日は、侯爵様。

ダルガルコーフ 今日は。

バガマーゾフ(クーカリニツクに。)昨日私はお芝居を見に参りました。あなた様のもんです。素晴らしかった。興味津々。満員でしたなあ。人、人、人で立錐の余地もありませんでした。御成功おめでとうございます。祝福の抱擁をお許し願います。どうぞ未永くご活躍を。

フィラートウ 旦那様のお帰りで。

クーカリニツク(小声で。ベネヂークトフに。)さあ君、これからが見ものなんだ。

(サルトウイコーフ、フィラートウの後について登場。(円形の)帽子、毛皮外套、ステッキ。小脇に大きな本を抱えている。誰にも目もくれない。ただフィラートウについて行くだけ。ベネヂークトフ、サルトウイコーフに腰を屈めて挨拶。)

しかし、空を切るだけ。お返しはなし。ダルガルコーフ、バガマーゾフ、クーカリニツク、天井を見つめて、サルトウイコーフの存在に気づかない振り。フィラートウ、ウオツカを注ぐ。サルトウイコーフ、客の一群に見えない視線を向け、一息にウオツカを飲み干し、黒パンを千切って口に放り込む。

(誰かを見るかのように)目を細める。二人の近衛士官、微笑む。)

サルトウイコーフ(独り言。)やれやれ、呆れたもんだ。  
*Secundus pars* とはね。 *Secundus!* (皮肉なあざ笑い。そして退

場)

(原註 サルトウイコーフは本の誤植を指摘している。Parisが女性名詞なので、seigneurとならねばならないところ。意味は「第二の部分」。これは歴史的事実。サルトウイコーフ家に、その誤植のある本が蔵書の中に残されていた。)

(ベネチークトフ、青くなる。)

サルトウイコーヴァ Mon mari... (夫は・・・)

クーカリニック(夫人の、フランス語での説明を遮って。)

奥様、どうかご心配なく。分かっておりますので、ちゃんと。

それから、どうぞ、我が国の言葉でお話し下さい、奥様。奥

様もお聞きになった事と思います。詩人の手にかかれば、我

が国の言葉でも、いかに素晴らしくなるか。

サルトウイコーヴァ(ベネチークトフに。)

夫は大変かわつておりますの。どうぞお楽になすつて。あのような夫の態度

は、お気になさらず。

(サルトウイコーフ、再び登場。帽子、外套、ステッキはなし。しかし、分厚い本は持つて来る。全員、好奇の目をもつて主人を見つめる。)

サルトウイコーフ やあ諸君、よく来た。(本を叩いて。)

Secundus pars. Secundus! なんというミスプリだ。わざとやっとな。

Corpus juris romanii. Elzevirii (ローマ法にひっかかるぞ、

エルゼヴィール出版社は。)(近衛兵二人に。)

おう、息子達! いたか。

(二人の息子、微笑む。)

バガマーズフ お許し願って、ちょっと拝見を・・・

サルトウイコーフ 下がりおろす!

サルトウイコーヴァ あなた、何てことを!

サルトウイコーフ 本は、手で触るものじゃない。手で触

る為に印刷されたんじゃないんだ。(暖炉の上に本を立てか

けて、サルトウイコーヴァに。)

いいか、お前、触りでもしてみる、私は・・・

サルトウイコーヴァ いいえ、飛んでもない。その必要も

ありませんわ、私。

サルトウイコーフ フィラートウ、ウオツカだ。さあ、諸君、掛けてくれ。

サルトウイコーヴァ 皆さん、どうぞお坐りになって。

(全員、坐る。フィラートウ、皆にウオツカを出す。)

サルトウイコーフ(クーカリニックの手の指輪を見て。)

ほほう、皇帝から贈られたな、その指輪。

クーカリニック はい。光栄にも。

ダルガルコーフ 皇帝おん自らの手で、あなたを祝福されたのですね、クーカリニックさん。

サルトウイコーフ 下らん! 下らん指輪だ!

クーカリニック これは!

サルトウイコーフ その指輪で思い出したんだが・・・フィラートウ、暖炉の上に何があるか、分かっているな。

フィラートウ はい。本です。

サルトウイコーフ 傍に寄るんじゃないぞ!

フィラートウ はい。畏まりました。

サルトウイコーフ うん、それで思い出すんだが・・・若い頃の話だ。皇帝パーヴェルが私を表彰して、指輪を授けてくれた。それに嵌めこまれていたダイヤ・・・いや、巨大な

ものだった。

(二人の近衛、父親にウインクする。)

サルトウイコーフ 君のそれ、そんなものは、二百ルーブリ、いや、百五十でも出せば自分で買える代物さ。

サルトウイコーヴァ あなた、何を仰るんです！

(ベネチークトフ、がつくりする。)

サルトウイコーヴァ 作り話じゃありませんか、みんな。

あなた、勲章など何も受けてはいらっしゃいませんか。

サルトウイコーフ お前が知らないだけだ。三十七年間、誰にも見せず、仕舞ってあるんだ。香(こう)の箱と一緒にな。

サルトウイコーヴァ よくそんな嘘を。

サルトウイコーフ これの言うことは聞かんで欲しい、諸君。ロシア皇帝が下しおかれる勲章について、女など何も知りませんのだ。・・・そうだ、皇帝と言えば、ついさつき、拝眉の栄に浴したなあ。ニエーフスキー通りで・・・*à la grande bougeois*・・・そう、橋に乗っておられた。馭者はアンチーヴだったな。

バガマーゾフ 失礼ながら、皇帝陛下をご覧になったと？

サルトウイコーフ そうだ。

バガマーゾフ それでは馭者はパーヴェルだった筈でしょ？

サルトウイコーフ いや、陛下の馭者はアンチーヴだ。

ダルガルコーフ 勲章のお話ですが、失礼ながら、あれはお馬の件の時ではなかったでしょうか。私の記憶に誤りがないければ。

サルトウイコーフ いや、馬の件ではない、侯爵。君は間違っている。これはあの件の後だ。もう皇帝アリエクサンドールの御世になっていた。(ベネチークトフに。)するとその、詩歌の仕事に携わっておられると言ったのだな？

ベネチークトフ はい。

サルトウイコーフ フン。そいつは危険な商売だ。ご存じかな？ 同業者のプーシキンを。あいつ、特高(皇帝官房第五課)にこの間引つ立てられおった。

サルトウイコーヴァ 不愉快ですわ、あなた。あなたと同席するのは。なんてことをお話になるのです。どうか、お止めになって。

サルトウイコーフ ああ、諸君、食べてくれたまえ、どうか。(サルトウイコーヴァに。)この話を聞いて一緒に憤慨しないようじゃ、危ないな。お前も引つ立てられるぞ。

サルトウイコーヴァ お止めになって、お願い。

ダルガルコーフ とところで、その話ですが、どうやら本当らしいです。ただ、随分昔のことだとは聞いています。

サルトウイコーフ いや、それは違う。私は今聞いたばかりだ。ツエプノイ橋を通りかかった時だ。男が叫んでいた。一体どうしたんだ、と私は訊いた。そいつは言ったね。「旦那、プーシキンがバクられましたぜ。」

バガマーゾフ 「バクられる」なんて、公爵、それは作り話じゃありませんか？ このペテルブルグの、いつもの。

サルトウイコーフ バクられるのが作り話だと？ とんでもない。この私だつて引つ立てられそうになったことがあるんだ。皇帝アリエクサンドールが、私の持ち馬を買いたいと

言つてな。相当な金額の提示があつた。一万ルーブリだ。私は手放すのが厭だつた。馬を撃ち殺したんだ。耳にピストルを突っ込んで、ぶつ放した。(ベネチークトフに。) ああ、君の詩は、私の図書室に入れてある。ゼツドの棚だ。最近何か、お作りになつたかな？

クーカリニツク それはもう、公爵。(ベネチークトフに。) そう、「思ひ出すこと」、あれがいい。(二人の近衛士官に。) ああ、お子様方、あなた方も詩がお好きな筈です。どうか、あなた方からお口ぞえを。

(二人の近衛、微笑む。)

サルトウイコーヴァ そう。私達みんなでお願ひしますわ。引つ立てられるなんて、暗い話はもう終り。楽しみだわ。

ベネチークトフ エーと、その・・・私は、全部覚えていくかどうか・・・

サルトウイコーフ おい、フィライトウ。皿をガタガタさせるのは止める。

ベネチークトフ

ニーナ、あなたは覚えているだろうか、

あの瞬間を。

あなたの忠実な歌うたいが、どんなに、

そう、全身を震わせてどんなに、

あなたに魅せられて、どんなに、

あの混雑した舞踏会の最中に、

ベネチークトフ あ、本当に忘れて仕舞つて・・・どんな

に・・・いや・・・

どんな風に、あなたの腰に片手をあてて、

羨望に満ちた目であなたのことを振り返る、

群衆の中を、僕が導いて行つたか。

あなたの腰にこの手をあてた時、

僕の掌(てのひら)は熱くなつた。

焼けるようだった。

その素晴らしい、炎のようなあなたの背中から、

僕の手が離れた時、どんなに残念だったか。

あなたが疲れ果て、

椅子に坐り、肩で息をする時の、

その胸の揺らぎ、

大海の寄せ返す優しい波のように、

僕には見えた。

そしてその大海に、白いミルクの泡の中に、

煙の中、霧の中から、浮き出るように、

二つの大波が描かれている。

(二人の近衛士官、顔を見合せ、目配せをして、杯を空ける。)

ベネチークトフ

僕の話聞きながら、ニーナ、あなたは、

何気なく頭を揺すつた。

するとその豊かな亜麻色の巻き毛が、

そつと僕の頬に滑り込んで来た。

ああ、ニーナ、

あなたはその瞬間を覚えているだろうか。

それとも時間という急流が、冷たい忘却の海へと、

全てを密かに流し去つて仕舞つたのだろうか。

クーカリニツク ブラーヴァ、ブラーヴァ。どうした、近

衛士官諸君、君達、拍手だよ。

(全員、拍手。)

サルトウイコーヴァ 輝かしい作品ですわ。

バガマーゾフ 素晴らしい詩だ！

サルトウイコーフ うん、これなら引っ立てられることはなさそうだ。

フィラートウ(サルトウイコーヴァに。)(ヴァランツォーヴァ伯爵夫人がお会いになりたいと。

サルトウイコーヴァ 居間の方にお通しして。(立ち上がる。)(皆さん、失礼します。私、ちよつとあちらの方に。煙草になさるのでしたら、どうぞ。(居間に退場。)

(サルトウイコーフ、客達と図書室の方へ退場 フィラートウ、客達にシャンパンを注ぎ、パイプを渡す。)

クーカリニツク わが祖国の最大の詩人に、乾杯！

バガマーゾフ そうです、そうです。

サルトウイコーフ 最大の詩人？

クーカリニツク この首を賭けてもいいです、サルトウイコーフ様。

サルトウイコーフ アガフオーン！

(アガフオーン登場。)

サルトウイコーフ アガフオーン！ 隣の部屋の十三番の本棚、ゼツドの棚にあるベネチークトフ詩集をここのこの棚へ。それからプーシキンのものはそちらに移す。(ベネチークトフに。)(こちらの棚は一流のものを入れることにしてある。(アガフオーンに。)(おい、その本、取り落として床に

でも落としてみる。お前、どうなるか。

アガフオーン 畏まりました、旦那様。(退場。)

(ベネチークトフ、名譽で身の縮まる思い。)

ダルガルコーフ クーカリニツクさん、私は御意思に全く賛同するものですが、しかし、噂は噂としてあるようにも思っているのです。つまり、我が国最大の詩人はプーシキンだと。

クーカリニツク あんな奴、社会の癌だ。

(アガフオーン、小さな詩集一冊を抱えて登場。本棚の横にある脚立に登る。)

サルトウイコーフ 何だと？ プーシキンが最大？ アガフオーン、待つておれ！

(アガフオーン、脚立の上で待つ。)

クーカリニツク しかしこのところ、何も書いてはいないのです、あの男は。

ダルガルコーフ 恐れながら、何も書いていないとは・・・それは・・・ついこの間、人づてに貰いましたよ。これです。

最近書いた詩の一部だそうで。残念ながら、本当に一部で。全部ではないのですが・・・

(バガマーゾフ、ベネチークトフ、クーカリニツク、その紙片を見る。二人の近衛士官、次々と杯を重ね、一気に飲み干す。)

クーカリニツク やれやれ、呆れたものだ。ロシア人なんだぞ、これを書いたのが。近衛士官諸君、こんなものの近くに寄らない方がいい。

バガマーゾフ うーん。(ダルガルコーフに。)(ちよつと写させて下さいませんか。罪深い人間でしてね、私は。好きなんです、発禁の文学が。

ダルガルーコフ どうぞ、どうぞ。

バガマーゾフ（机の傍の椅子に坐つて。）ただ、侯爵、誰にも内緒ですよ。（書き写す。）

クーカリニツク この詩が現代のロシア人に理解されるものですか。甚だ疑わしい。そうだよ、ベネチークトフ、ロシア語なんかで書くもんじゃない。理解される訳がない。（イタリヤに行くんだ、イタリヤに。）あの神のようなアリギエーリの書いた三韻句法の詩が未だに響いているあの国にな。あの偉大なフランチェスコに手を差し伸べるんだ。彼のカンツォーネを聞けば、必ずインスピレーションが湧く。イタリヤ語で書くんだけ、ベネチークトフ。サルトウイコーヴァ（居間から出て来て。）議論、まだ議論をやつてらっしゃるのね。（食堂の方から退場。）

バガマーゾフ（素晴らしい演説です。）ブラーヴァ、ブラーヴァ、クーカリニツクさん。

ベネチークトフ どうなさつたのですか、クーカリニツクさん。随分熱の入つた演説ですね。

クーカリニツク 当たり前じゃないか。私は不当なことが嫌いなんだ。それは慥に、かつてはプーシキンには才能があつた。深いものじゃない。表面だけのものだ。しかしそれでも才能ではあつた。しかしあいつはそれを擦りきらせたんだ。使い果たしたんだ。光を出していた小さな蠟燭も、燃え盡きたんだ。イエスが叱りつけたあの無花果の木のように、不毛になつたんだ。そして今作っているものと言へば、こんなやぐざな詩だ。あいつが現在保持し得ている唯一のもの・・・それは自惚れだ。あの傲慢な自惚れ！ それに他人を評する

時のあの容赦のなさ！ 可哀相な男だ。

バガマーゾフ いいぞ、いいぞ、大統領！

クーカリニツク さあ、この国の最大の詩人、ベネチークトフに乾杯だ！

ヴァランツォーヴァ（図書室の敷居のところまで。）あなたその大演説、全部嘘ですわ。（間。）なんて残念なことなんでしょう。どんなに素晴らしい人物が自分の目の前に登場して来て、それと分かるのは、ほんの一握りの人達だけ・・・ああ、プーシキンの天才、輝き！ あの人の手にかかると、なんていう奇跡になるのでしょうか！ でも、悲しいことにあの人には敵がいる。やつかみがある。御免なさい。でも、今聞いたように思えましたの。丁度今。ここにいらつしやる誰かの口から、人を貶（おとし）める暗いやつかみの声を。本<sup>4</sup>当に、ベネチークトフなんか、酷い詩人ですわ。空っぽ。何<sup>1</sup>の中身もない・・・

クーカリニツク 失礼ながら、伯爵夫人・・・

（ダルガルーコフ、バガマーゾフの肩に縋りながら嬉しそうに笑う。）

サルトウイコーヴァ（図書室に戻つて来て。）あら、ヴァランツォーヴァさん。ご紹介致しますわ。文学の人達ですよ。こちらがクーカリニツクさん。そしてこちらがベネチークトフさん。

（ダルガルーコフ、嬉しくて息がつまりそうになり、ハハハ言う。二人の近衛士官、黙つて食堂の方へ行き、そこから退場。）

ヴァランツォーヴァ まあ、どうしましょう。・・・御免

なさい。私、調子に乗って仕舞って……許して頂戴、サルトウイコーヴァさん。いられないわ、私、ここには……  
(居間に退場。)

(サルトウイコーヴァ、ヴァランツォーヴァの後を追う。ベネチークトフ、引きつった顔で食堂に退場。クーカリニツク、その後を追う。)

ベネチークトフ 朝食にだなど。何故私をこんなところへ引つ張り出したんですか……家に静かに引つ込んでいたところだったのに……いつもあなただ。あなたのせいで……  
クーカリニツク おいおい、君。真面目に取っているんじゃないだろうな、まさか。あんな社交界の婦人が言っている戯言(たわごと)を。

サルトウイコーフ アガフォン！二つとも落第だ。プーシキンもベネチークトフも。あっちの部屋へ持って行け。十三番の柵だ！

(幕)

### 第二幕

(夜。ヴァランツォーヴァの屋敷。ズイムニイ・サードウ。噴水あり。木立の緑の中に外灯がいくつか立っている。網の中の小鳥達が、驚くのか、はばたきが聞こえる。円柱が舞台奥にあり。その奥に居間が見える。居間は無人。遠くからオーケストラの音。群衆のざわめき。円柱の傍に、ターバンをした黒人。不動の姿勢。その茂みの中に、客達の視線を逃れて、ダルガルコーフが小さな長椅子に坐っている。舞踏会用の正装。ダルガルコーフの前のテーブルにはシャンパン。ズイム

ムニイ・サードウでの客達の会話に耳をすませている。円柱からあまり遠くないところにプーシキナが坐っている。そしてその隣に、ニカラーイー世。)

ニカラーイー世 ああ、この噴水の水の落ちる音。それに茂みの中の小鳥のはばたき。悲しくなるんですよ、私は。こいういものを聞くと。

プーシキナ あら、どうしてですか？

ニカラーイー世 人の作った人工の自然のお陰で、却って本物の自然を思い出して仕舞うのです。のんびりした静かな小川のせせらぎ、樫の木が作るあの長い影……この重々しい衣装などかなぐり捨てて、穏やかな谷間の、人里離れた村に引き籠もることが出来たら。そいうところ初めて、私のこの悩み多き心も、休息を得ることが出来るのだが……

プーシキナ 陛下はお疲れになっていらっしゃるのですわ。 15

ニカラーイー世 誰も分かってくれてはいない。これから先だつて分かる筈はない。私がどんな重荷を背負わねばならぬ運命にあるかを。

プーシキナ そのような暗いお言葉はお止めになって。私達みんな、悲しくなつて仕舞いますわ。

ニカラーイー世 今本心からそう思っていますか。いや、それはそうでなければ。そのような澄んだ目が、嘘をつくことが出来るなど(とても考えられない)。あなたが口にする一つ一つの言葉が、私には宝石のように尊い。あなた唯一人だ、私のためにそのような言葉を見つけてくれるのは。あなたが優しい人なのだと、私は信じたい。でも怖いことがひとつ。そのために、私の出来ることと言ったら、あなたの顔

をチラチラと盗み見ることだけですが、それだけで、あなたを・・・

プーシキナ 怖いことって、何ですか？

ニカラーイ一世 あなたのその美しさ、それです。ああ、美とはなんて危険なものか。ご注意ください。どうか自重を。これは心からの忠告です。どうか心にどごめて。

プーシキナ 光栄ですわ、そのようにお心にかけて下さって。

ニカラーイ一世 軽くあしらわないで、どうか。私は真面目なものです。心からそう思っているのです。ああ、私はどんなに度々あなたのことを考えるか。

プーシキナ 私など、それに値しませんわ。

ニカラーイ一世 今日私はあなたの家の前を馬車で通りました。でも鎧戸が閉まっていました、あなたの部屋は。

プーシキナ お昼の太陽が好きでありませんの。冬の日の薄暗がり、そんな程度の明るさが好きなのです。

ニカラーイ一世 分かります。どうしてなのでしょう。私が出外する。するとその度に何か目に見えない力が私をあなたの家の方へと導いて行くのです。そして私は無意識に、頭をあなたの部屋の方へ向け、チラとでもいいから、あなたの顔が窓から覗いてくれないかと、心待ちするのです。

プーシキナ 仰らないで、そのようなこと・・・  
ニカラーイ一世 何故？

プーシキナ 不安になってしまいますもの。

(居間から侍従登場。ニカラーイ一世に近づく。)  
侍従 陛下、皇后様が陛下にお伝えするようにとお命じに

なりました。十分後にマリーヤ大公妃様とお立ちになりますと。

(プーシキナ立ち上がり、お辞儀をし、居間の方へ退場。)

ニカラーイ一世 皇后様とは何だ。皇后陛下だ。それから、マリーヤ大公妃だと？ マリーヤ・ニカラーイエヴナ大公妃殿下だ。ちゃんとさえ、ちゃんと。それにだ、人と話している時に近づくとは何事だ。馬鹿めが！ まあいい。皇后陛下に伝える。十分後にまいりますと。あ、それから、ジュコーフスキーを呼べ。

(侍従退場。ニカラーイ一世、暫くの間一人。ちょっと離れた場所を厳しい目付きで睨む。勲章をつけ、肩章をかけたジュコーフスキーが登場して、お辞儀。)

ジュコーフスキー 私めを、陛下、お呼び遊ばされたとのこと・・・

ニカラーイ一世 ああ、ジュコーフスキー、あの円柱のところに黒い服の男がいる。誰なんだ、あれは、一体。

(ジュコーフスキー、その方を見る。どうしようもなく、身を固くする。)

ニカラーイ一世 あの男にお前、言ってやれんのかね。あれが不埒千万だということ。

(ジュコーフスキー、溜息をつく。)

ニカラーイ一世 あんなものを着てここに来るとは一体どういう気なんだ。どうやらあの男は自分の行動の馬鹿さ加減に全く気付いていないようだ。仲間のリベラリスト達と、国民総決起大会に出席しようとしていたのが間違つて舞踏会に迷い込んだか。あいつに決められている制服はあれじゃない



ぞ。決められているものを何故着てこないんだ。私に対して敬意を払い過ぎるでも思っているのか。あの男に言つて聞かせるのだ。私は力づくで人に服従を強いたことはない。誰に對してもだ。(ましてや、こんなところに。) 何故黙っているのだ、ジュコーフスキー。

ジュコーフスキー どうか陛下、あの男に對してお怒りになりませぬように。そしてあの男に懲罰をお与えになりませぬように。

ニカライー一世 よくないぞ、ジュコーフスキー、その言い方は。お前と知り合つてから、もう何年たつ。(私の考え方は今ではお前に分かつている筈だぞ。) 私が人を罰するのではない。法が罰するのだ。

ジュコーフスキー 恐れながら陛下、このようなことを申し上げて御勘気に触れませぬかと。しかし、誤つた教育、あの男の育つた社会体制、それが……

ニカライー一世 社会体制だと? 社会体制があいつに影響を及ぼしたとも言いたいのか。とんでもない。影響を及ぼしているのはあいつの方だ。あいつが社会体制に影響を及ぼしているのだ。我等が憎つき「デカプリストの友人達」に肩入れしたあいつの詩を思い出して見る。それで明らかだろうが。

ジュコーフスキー 陛下、あれはもうずっと昔の話でして。ニカライー一世 あの男は、あれから何も変わつておらんのだ。

ジュコーフスキー 陛下、今では彼は陛下の熱心な崇拜者でして……

ニカライー一世 ジュコーフスキー、お前の親切は分かっている。お前はそれを信じているのだな。私は違つた。

ジュコーフスキー 陛下、どうぞあの男にご配慮を。祖国に栄光をもたらしているのです、あの男は。

ニカライー一世 違つた、ジュコーフスキー。あんな詩で、我が祖国に何の栄光をもたらすというのだ。この間出したあれ……プガチョーフ伝。何だあれは、一体。悪党に何が伝記だ。あの男はプガチョーフという人物に奇妙な愛着がある。

小説にもおつて。あれを大鷲に譬えおつた。このことで弁解の余地でもあるというのか。私はあの男を信用しない。あいつには何かが欠如している。温かい何かが。さ、皇后のところへ行こう。お前に用があつたらしい。

(円柱の方へ退場。)

(黒人、持ち場を離れ、ニカライー一世の後に続く。ジュコーフスキー、円柱まで来て遠くを見つめ、誰かを密かに拳で脅す。そして退場。)

(ヴァランツォーフ大公夫妻登場。ニカライー一世の方に真っ直ぐ向かう。二人、深くお辞儀。)

ヴァランツォーフ Stiel(陛下!)

ヴァランツォーフ Votre Majeste Imperial …(陛下……)

(夫妻退場。円柱の方からではなく、横の方から、バガマーゾフ登場。制服姿に勲章数個をつけている。茂みの中に急いで入る。)

ダルガルコーフ おいおい、この場所は先約ありだぞ。

バガマーゾフ そんな。入れて下さいよ、侯爵。あ、その姿、隠者を洒落こんでいるんですね。

ダルガルーコフ お前もじゃないか。まあいい。坐れ。なかなかうまいシャンパンだ。

バガマーゾフ 如何ですか、舞踏会は。セミラミス（流の美人がいますか）は？ 舞踏会はお好きなのですか、侯爵は？

ダルガルーコフ 大好きだね。賤民だ、賤民の群がうようよだ。

バガマーゾフ おっと、お前さん、気をつけてものを言わなきゃ。

ダルガルーコフ 何だと？ お前さんとは何だ、お前さんとは。

バガマーゾフ 下手に出ればいい気になって。お前さんで充分なんだ、お前さんは。おむつが取れたのがやっとこの間の癖して。こつちはな、現在既に皇帝直属の枢密顧問官なんだからな。

ダルガルーコフ 困りましたな、侯爵。社会的地位を云々するような野暮なことは。

バガマーゾフ 社会的地位、貴族、で成り立っているんですよ、侯爵、この舞踏会は。

ダルガルーコフ 貴族で成り立っている？ これがかとんでもない。やっと数えて五人だね。それに、本物の貴族と言え、その中で私一人だ。

バガマーゾフ ほほう。本物はあなたが一人。訊いていいのですかね、それが何故か。

ダルガルーコフ 何しろ、聖者の出だからな、私は。殉教者チエルニーゴフ公、ミハイール・フスエヴァロードゥヴィツチ、聖者の列に入れられたあの偉大な侯爵の血筋だ。

バガマーゾフ なるほど。その顔を見れば一目で明らかです、聖者の血を引く人物だつてことは。（遠くを指差して。）で、どうですか、今通ったあの人物、あれは貴族ですかね。

ダルガルーコフ 本物、本物。本物中の本物だ。大臣の妾から宮廷人事長官の称号を買取ったんだからな。あの酷いご面相で、よくそれだけの財をなしたもんだよ。

バガマーゾフ 分かった。分かりましたよ、あんたさんの毒舌は。おや？ あそこにいるのは侯爵夫人、アーンナ・ヴァスリーエヴナじゃ・・・

ダルガルーコフ そう。あいも変わらぬお盛んな婆さんだ。墓に半分足を突っ込んでいるつていうのに舞踏会というと必ず駆けつける。

バガマーゾフ こいつはご挨拶ですね。その隣にいるのが、どうやら、イヴァーン・キリーロヴィツチ・・・

ダルガルーコフ いや、弟の方だ。グリゴリー・キリーロヴィツチ。かの有名な豚野郎。

バガマーゾフ ちよつと、ちよつと、侯爵。人に聞かれたら、ただじゃすみませんよ。

ダルガルーコフ 残念ながら、何事も起こらないね。厭な奴等だ。騙り！ 下司野郎！ あまり酷くて、最低は誰か、決めるのも難しい。

バガマーゾフ それはそう。聖者ダルガルーコフ侯爵閣下に叶う貴族など、何処を捜してもいはいはない。

ダルガルーコフ おい、茶化すな。真面目なんだ。（シャンパンを飲む。）御本尊もいた。

バガマーゾフ え？ 陛下が？

ダルガルコーフ そう。

バガマーゾフ 誰と話していた？

ダルガルコーフ 例のアラブ人……の妻とだ。いや、いい図だった。来るのが遅かったよ。

バガマーゾフ いい図？

ダルガルコーフ 手を撫でて。プーシキンの奴、またこ褒美だ、きつと。

バガマーゾフ どうも、お好きじゃないようですね、あの詩人が。

ダルガルコーフ 大嫌いだ。滑稽だよ。寝取られ男の癖に。

ここでは差し向かいの熱熱（あつあつ）場面。すぐそばのあの円柱のところ、酷いフロックコート姿で、髪振り乱し、目は狼のようにキラキラさせて突っ立っている。あのフロックコートは貴奴（きやつ）に高いものにつくぞ。

バガマーゾフ 噂によれば、あなたのことを皮肉ってあの男、詩を書いたそうじゃありませんか。

ダルガルコーフ 誰が気にするか、寝取られ男の書くものなどに。シッ、誰か来る。

（庭にゲツケレン登場。暫くしてプーシキナ。）

ゲツケレン あなたのをとをずつとついて来たのですが、分かりました、何故あなたが「北の妖精サイキ」と呼ばれているか。その美しさなのですね。

プーシキナ ああ、どうか男爵……

ゲツケレン そうでした。もう取り巻き連中のこういうお世辞でうんざりなさっているのですね。どうかお坐りになっ

て、ナターリヤ・ニカライエヴナ。私の話が退屈では？……

プーシキナ いいえ。嬉しいですわ、わたくし。

（間。）

ゲツケレン すぐ来ますよ、あいつは。

プーシキナ わたくし、分かりませんわ！ どなたのことをお話になつていらつしやるのです。

ゲツケレン ああ、どうかそのような話し方をなさらないで。私はお味方なのです。敵ではないのです。でもその美しさ、それがどんな不幸をこれからも齎（もた）らすことか。どうかあの息子を返して。どんな魔法を使つたんでしょう、あなたは。息子は今ではあなたを愛しているのです。

プーシキナ お止めになつて、男爵。そのようなお話は何いたくありません、わたくし。

ゲツケレン どうか行かないで。すぐ息子がやって来ます。二人が話せるようにと、私はわざとここに来たのですから。

（庭にダンテース現れる。ゲツケレン、傍に退く。）

ダンテース 糞でも食らえ、こんな舞踏会！ 近づこうにも、その機会がありやしない。二人だけで話していたな、皇帝と。

プーシキナ お願い、止めて！ 何ですの、その顔！ 客間からでも見えるんですよ、ここは。

ダンテース 僕のことを責め立てておいて自分は何だ。裏切りはそつちじゃないか。手を触らせて！ 放つていたじゃないか。

プーシキナ （分かりました。）行きます。行きます、私。水曜日、三時。離れて、もう。お願い。早く！

(円柱からガンチャローヴァ登場。)

ガンチャローヴァ 帰ってもいい頃ね、ナターリヤ。プーシキン、あなたのことを捜していたわ。

プーシキナ ええ。ええ。Au revoir, monsieur le baron. (さようなら、男爵。)

ゲツケレン Au revoir, madame. Au revoir, mademoiselle. (では失礼します、お二人様。)

ダンテース Au revoir, mademoiselle. Au revoir, madame. (では失礼。)

(音楽、高らかに鳴り響く。プーシキナとガンチャローヴァ退場。)

ゲツケレン お前のために大分犠牲を払ったんだぞ。覚えておいてくれなきゃな。(ダンテースと共に退場。)

(この時までにヴァランツォーヴァ、居間に現れている。客達が彼女に近づいては別れの挨拶をする。音楽、急に止む。ぱったりと静かになる。)

ダルガルーコフ 実にいいもんだ、舞踏会ってやつは。全く、実に……

バガマーゾフ やれやれ、何をまた!

(先程バガマーゾフが登場した、(家の)出口から、ヴァランツォーヴァ、庭に出て来る。大変疲れている。ベンチに腰掛ける。)

ダルガルーコフ 舞踏会主催者、大使殿に感謝感謝だな。見たろう、事の成り行きを。プーシキンの奴、間男の角(つ

の)が、前と後ろに。前はダンテースの、後ろは皇帝のだ。なかなか愛すべきおっさんだよ、あいつは。

バガマーゾフ ひどく嫌ったものですね、侯爵、あの男を。

一体誰なんですか? あいつに匿名の中傷を出したのは。誰にも言いません。誓いますよ。終世の友じゃありませんか。それにしても凄いい中傷だ。あれなら森だって焼けてしまつ。もう二箇月も探索が続いているのに、犯人が誰か分からないつ

ていつんですからね。巧妙極まりない。ねえ、侯爵、誰なんですか。

ダルガルーコフ 誰だつて? 俺が知るわけないだろう? 何故俺に訊くんだ、そんなことを。ま、しかし、誰がやっているにしろ、あいつにはそれが必要なんだ。忘れないから

な、あれを。

バガマーゾフ 慥に。あれじゃ忘れられっこない。さてと、退散します、侯爵。連中が外灯を消しに来る。見られちゃまずい。

ダルガルーコフ じゃ、失敬。

バガマーゾフ でも別れに際してちょっと、これだけは言うておきますよ、侯爵。そう。言葉には充分気をつけるんですね。(退場。)

(ダルガルーコフ、シャンパンを飲み干し、茂みから出る。)

ヴァランツォーヴァ あ、侯爵。

ダルガルーコフ 伯爵夫人……

ヴァランツォーヴァ お一人で? 何故? (舞踏会で) 退屈なさつていらしたのでは?

ダルガルーコフ どう致しまして、伯爵夫人。お宅で催される舞踏会で退屈などと。素晴らしいです、実に!

ヴァランツォーヴァ でも私、悲しいですわ、何故か。

ダルガルーコフ 悲しいなどと、そのようなことをお聞きすると、私も悲しくなってきました。でもそれは神経性のもの、です、きつと。

ヴァランツォーヴァ いいえ、この悲しみは出口のないもの。ああ、なんて卑劣なことがこの世の中には溢れていることでしょう。そうお感じになりますわね、侯爵、あなたも。

ダルガルーコフ ええ、それは、毎日。少しでも感受性のある人間なら誰でもそれを感じない訳には行きません。道徳が崩壊したのですよ。そういう時代なのです、侯爵夫人。でもこのような時に、何故そのような考えが・・・

ヴァランツォーヴァ Perdar! (仏語 首つり役人) 首つり役人！ 卑劣漢！

ダルガルーコフ 御気分がお悪いのですね、伯爵夫人！人を呼びましょう。

ヴァランツォーヴァ あなたが嘲笑っているのを聞いたのです。毒のある中傷を誰かが送っている。それを聞いてあなたは喜んでいました。・・・それをやっているのはあなたご自身です！ あの人に余計な心配を与えるのが厭なので、あなたの名前は出しません。でも、その心配さえなければ、あなたを突き出しますわ、あの人の上に。あなたをぶつ殺せばいいの！ 犬のように！ 首吊り台にかけて吊るせば、なんてせいせいするでしょう。さ、出て行きなさい、この家から。出て行くんです！ (退場)

(灯が一つ一つ消えて行く。)

ダルガルーコフ (一人になって。) 聞かれてしまったか。糞っ、雌犬め！ プーシキンの女が、あいつも。円柱の後ろ

で聞いた奴がいたんだ。そう、きつとそうだ。それもあの男の仕業だ。何もかもあの野郎のせいだ。よし見てる。思い知らせてやる！ 必ず、きつと思知らせてやるぞ！ (びつこを引きながら円柱の方に退場)

(暗転。緑色の幕。暗闇。幕の後ろに蠟燭が現れる。夜。国家公安委員会の一室。机についている男、レオンチイ・ヴァスイリーエヴィッチ・ドゥービエリト。扉がそつと小さく開かれ、憲兵ラケーイエフ、登場。)

ラケーイエフ 閣下、ビトウコーフです。ドゥービエリト 通せ。

(ラケーイエフ退場。ビトウコーフ登場。)

ビトウコーフ ご機嫌麗しう、閣下。ドゥービエリト うん。で、どうだ、お前の方は。元気がなつたか。

ビトウコーフ はい、閣下。お陰様で。ドゥービエリト お陰？ お前のことなど、頭に浮かんだこともない。お陰とはな。しかし、回復したんだな？ で、何だ、今日は。こんな夜更けに。

ビトウコーフ 小生、未履行の任務、これあり。病気休暇中も、終始当該案件が胸に掛かり・・・

ドゥービエリト 胸に掛かろうと掛かるまいと、お前のことなど、陛下はどうでもいいのだ。任務は何だったのだ。誰かの監視なのだ。お前は全力をつくしてそれをやりさえすればいいのだ。それから言葉を飾る必要はない。ここは演説をする場所じゃない。

ビトウコーフ 畏まりました。侍従プーシキン秘密追跡調

査の過程において小生、当該人物の自室に忍び込むことに成功しました。

ドゥービエリト　でかした。よくやったぞ。それでお前、どつかれずに済んだのだな？

ビトゥコーフ　大丈夫です、それは。

ドゥービエリト　下男は何と言ったかな。フロールじゃなかったか？

ビトゥコーフ　ニキータです。

ドゥービエリト　問抜けのニキータか。それで？

ビトゥコーフ　入ったところは、閣下、食堂になっておりまして・・・

ドゥービエリト　分かっている。そこはとばせ。

ビトゥコーフ　次の間が客間です。客間にはピアノがあり、その上に侍従閣下プーシキンの詩が置いてありました。

ドゥービエリト　ピアノの上に？　どんな詩だ。

ビトゥコーフ

「嵐を呼ぶ不吉な雲が、低く空を覆っている。

嵐で吹きだまつた雪を、つむじ風が、

今度は丸く集める。

ひゅうひゅう言う、嵐の声。

時には獣のように唸り、また時には、

子供のすすり泣きのように、かぼそく泣く。

時には屋根の上の擦り切れた藁を、

びゅつと鳴らし、

また時には、遅く到着した旅人のように、

家の窓を叩く。

嵐を呼ぶ不吉な雲が、低く空を覆っている。

嵐で吹きだまつた雪を、つむじ風が、

今度は丸く集める。

ひゅうひゅう言う、嵐の声。

時には獣のように唸り、また時には、

子供のすすり泣きのように、かぼそく泣く。」

ドゥービエリト　大変なものだな、お前の記憶力は。それで？

ビトゥコーフ　危険なことでしたが、二度も書齋にまで入り込みました。本棚にはぎつしりと本が。

ドゥービエリト　どんな本だ。

ビトゥコーフ　覚えられるだけのものは、覚えて参りました。閣下。暖炉の左手にあるものを順に述べます。「梟・・・

夜の鳥」「騎士の娘」「快盗、ヴァニカ・カイン」「アルコー

ル中毒について　また誰にでも出来るその治療法・・・大学

出版」・・・

ドゥービエリト　その本はお前に推薦出来るな。飲むんだ

ろう、お前は。

ビトゥコーフ　いいえ。一滴も。

ドゥービエリト　本はもういい。それで？

ビトゥコーフ　今日、実に重大な紙切れを見つけました。

床に落ちていたのです。「すぐに私のところに来ること。さ

もないと、大変なことになるぞ。」署名は、ウイリアム・ジュー

ク。

(ドゥービエリト、ベルを鳴らす。ラケーイエフ登場)

ドゥービエリト　ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィツチ

を呼べ。

(ラケーイエフ退場。ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィツチ登場。文官である。)

ドゥービエリト ウィリアム・ジュークのは。

ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィツチ 限なく調べましたが閣下、サンクト・ピエチエルブルク(ペテルブルク)にはそのような人物は見つかりませんでした。

ドゥービエリト 明日までに調べとけ。

ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィツチ はあ、そのような人物は閣下、存在しないように思われます。

ドゥービエリト 地に潜ったか。ペテルブルクには、イギリス人は一人もいないとでもいうのか。

ラケーイエフ(登場して。) 閣下、丁度その件に関して、バガマーゾフ侯爵様がお出でになりましたが。

ドゥービエリト うん。お通しして。

(ラケーイエフ退場。バガマーゾフ登場。)

バガマーゾフ 失礼致します閣下、ジュークなる人物の正体を探索中とお聞きしましたので。それはジューコーフスキーです。時々あの男は、冗談にそつ署名するのです。

ドゥービエリト(ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィツチに、下つてよいと手で合図して。) 下つてよい。(バガマーゾフに。) ちょっと席をお外し下さい、侯爵、後でまたお願います。

(ヴァスィーリイ・マクスィーマヴィツチとバガマーゾフ退場。)

ドゥービエリト 何だ、この大馬鹿野郎。ただ飯食らいだ

ぞ、貴様は。ヴァスィーリイ・アンドウレイエヴィツチ・ジューコーフスキー、皇太子の養育係、歴とした文官だ。その男の筆跡ぐらい見抜けなくてどうする。

ピトウコーフ はっ、これは大失敗で。申し訳ありません、閣下。

ドゥービエリト 役所中が振り回されたぞ。貴様のせいだ。ぶん殴られてしかるべきところだ、ピトウコーフ。それで？

ピトウコーフ はっ。今日のことです。夕方。机に手紙がありました。外国人宛のものです。

ドゥービエリト また外国人か。

ピトウコーフ はっ、さようで、閣下。ニエーフスキー通り、オランダ大使館、ゲツケレン男爵宛。

ドゥービエリト ピトウコーフ。(手を出す。) その手紙を！ 出すのだ、その手紙を！ 三十分以内に持って来い。 23

ピトウコーフ 手紙を？ 手紙を持って来るのですか？

御想像下さい、閣下。手をわななかせながら部屋に忍び込む私を。何時なんどき彼が帰って来るか分からないのです。手紙を持って来る。それは危険です。

ドゥービエリト 給料を受け取る時、貴様の手はわななきはせんぞ。(まあいい。分かった。手紙はいい。しかし) しっかり探るんだ。何時その手紙が渡されるか、大使館の誰に受け取られたか、また誰によつて返書が運ばれたか。行け。

ピトウコーフ 畏まりました。閣下、私の報酬のことなのですが、支払いをどうか。

ドゥービエリト 貴様の報酬？ あのジュークの件で帳消しじゃないのか、お前の報酬など。(まあいい) ヴァスィー

レイ・マクスイーマヴィッチのところへ行って支払って貰え。三十ループリだ。

ビトゥコーフ 三十ループリですって？ 閣下。私には子供達もいるのです・・・

ドゥービエリト 「イスカリオテのユダ、主教のもとに出でたり。ここにおいて主教、ユダに約せり・・・」何を約束したか。なあ、ビトゥコーフ、銀三十枚だ。それにちなんで、私は誰にでも、報酬は三十と決めてる。

ビトゥコーフ お願いです閣下、せめて三十五に・・・

ドゥービエリト 三十五。それはちょいと、振る舞い過ぎだな。行け。それから、バガマーゾフ侯爵に、またここへと。

(ビトゥコーフ退場。バガマーゾフ登場。)

バガマーゾフ 当ててご覧になりますか閣下、この紙が何か。

ドゥービエリト 当てっこするなどと、愚劣ですな。それはゲツケレン宛の手紙の写しですよ。

バガマーゾフ 驚きました。まるで魔法使いですね、閣下は。(紙を差し出す。)

ドゥービエリト いえいえ、魔法使いはそちらの方です、侯爵。どうやって手に入ったんでしょう、これが。

バガマーゾフ いえ。単に屑籠に捨ててあったのです。下書きですから、残念ながら全文ではありませんが。

ドゥービエリト 実に有り難い。それでももう発送されましたか。

バガマーゾフ 明日侍僕が持つて行く筈です。

ドゥービエリト 他に何かございましたかな、侯爵。

バガマーゾフ サルトウイコーフ家で、文学のサロンが催されました。

ドゥービエリト あのおいぼれのほら吹き奴が。どんなことを言っていました。

バガマーゾフ 罵詈雑言です。陛下のことをル・グラン・ブルジュワだと。(訳註「大工場主」ほどの意。)(紙を取り出して。)(その時にピエーチャ・ダルガルーコフが書いたものですが・・・)

ドゥービエリト あのびっこが・・・

バガマーゾフ そうです。

ドゥービエリト 成程。で、他には？ 侯爵。

バガマーゾフ ヴァランツォーフ家で舞踏会が。(と言いながら先程の紙を手渡す。)

ドゥービエリト (紙を受け取って。)(これは有り難い。)

バガマーゾフ 閣下、あの男は気をつけなければいけません。あらゆる所に毒を流す人物です。その影響は、図り知れませんが。他の人間を全て奴隷呼びわりです。もう一方の足も切り落としてやればいいんです。自分は殉教者の出だなどとはざきおつて。

ドゥービエリト 「出」ではなく本人が殉教者になる番ですな。

バガマーゾフ ではこのへんで閣下、失礼を。

ドゥービエリト よい仕事をして下さいましたな、侯爵。いづれこのことは伯爵にご報告致します。

バガマーゾフ これは有り難いです。自分の義務を果たしたまでのこと。心から感謝致します。



ドゥービエリト ええ、ええ。義務は義務として、侯爵、先立つものが必要じゃありませんかな？

バガマーゾフ ええまあ、二百ルーブリあれば。

ドゥービエリト では切りのいいところで三百ということに。十ルーブリ紙幣二十枚。どうかヴァスィーリイ・マクスィーマヴィッチのところでお受け取り下さい。

(バガマーゾフ、一礼して退場。)

ドゥービエリト (バガマーゾフから渡された紙を読む。)

「・・・嵐を呼ぶ不吉な雲が、低く空を覆っている。嵐で吹きだまつた雪を、つむじ風が、今度は丸く集める・・・」

(物音に耳をすます。窓から外を見る。肩章を直す。)

(扉が開き、憲兵パナマリョーフ、その後には扉のところにニカラーイー世、登場。ニカラーイー世は頭に重騎兵の兜、軍外套姿。そしてその後ろにベンケンドルフ。)

ドゥービエリト ご機嫌うるわしう、陛下。ご報告申し上げます、陛下、当憲兵隊においては、全てが順調であります。

ニカラーイー世 伯爵とここを通りかかってな。お前のところにまだ灯がついているのを見たのだ。仕事なのだ。邪魔かな？

ドゥービエリト パナマリョーフ、外套を。

(パナマリョーフ、二人の外套を恭しく取り、退場。)

ニカラーイー世 (自分が最初に坐り。) 坐ってくれ、伯爵。

お前もだ、ドゥービエリト。

ドゥービエリト (立った儘。) 畏まりました、陛下。

ニカラーイー世 何だ。何の仕事なのだ。

ドゥービエリト 詩を読んでおりました、陛下。陛下にご

報告申し上げようと考えておりました。

ニカラーイー世 では仕事を続けるんだな。邪魔はしない。(ニカラーイー世、そのへんにある本を取り上げ、めくって見る。)

ドゥービエリト やくざな文人達のやることですが、陛下、ご覧下さい。プリュローフの描いたキリストの磔(はりつけ)の絵があります。この絵について書いたプーシキンの詩を書き写して広めようと、連中がこの通り・・・ご記憶のことと思いますが陛下、陛下はあの絵に見張りをつけるようにとお命じになりました。詩の断片しか、残念ながら入手出来ておりませんが・・・(読む。)

しかし今、その聖なる十字架の絵の傍らに、まるで市長の家の玄関を護るかのよう、

本来そこには、

尼さんこそが控えているべき場所なのに、

鉄砲を抱え、軍帽をかぶった敵(いか)めしい兵士が

二人立っている。

何のための見張りなのか、誰か教えてくれないか。

この磔の絵が、国家の持ち物で、

盗難に遭うのを恐れているとでも言うのか。

或いは鼠に引かれて行くのを。

ここで飛びます。

それとも民衆がその絵に辱めでも与えはしまいかと、恐れているのか。

そもそも、その民衆の罪の贖いのためではないか、

彼が十字架にかかって死んでいったのは。

(その男の絵に、

民衆が辱めを与えるはずがないではないか。)

或いは旦那衆がその絵をご覧になるのを、

民衆が押しかけて行って、

邪魔することのないようにと、か。

ベンケンドールフ その詩の題は？

ドゥービエリト 「民衆の力」です。

ニカライー一世 そんなことでもやらかすぞ、あの男は。

神への畏敬、祖国に対する愛、それは毛ほどもありはしない。

ああ、ジューコフスキー、いくらお前の弁護があるうと・・・

それにしてもあの男、よく回る舌だ。・・・可哀相なのは家

族だ。あいつの妻・・・いい女なのに。・・・他には。

ドゥービエリト もう一つ詩の写しが、陛下。学生、アン

ドゥリエーイ・スイートウニコフを家宅搜索した際に見つけ

たもので。やはりアー・プーシキンと署名が。

ベンケンドールフ どんなものだ。

ドゥービエリト 恐れながら。お読みするのは憚られまし

て。

ニカライー一世 (本をめくりながら。) 読みたまえ。

ドゥービエリト (読む。)

ロシアには法などない。

あるのは棒切れだ。

その棒切れの上に王冠が乗っている。

ニカライー一世 それも奴か。

ドゥービエリト はい。写しの最後にアー・プーシキンと。

ベンケンドールフ 厭うべきことが書かれていると、必ず

署名はそれだ。そういう役割も演じているのだ、あいつは。

ニカライー一世 お前の言う通りだ。(ドゥービエリトに。)

そこも調べるんだな。

ベンケンドールフ 他には？ 差し迫っているものが何か

あるのか。

ドゥービエリト はい。正にその差し迫った事が。明後日

までにこの町で決闘が行われます。

ベンケンドールフ 誰と誰のだ。

ドゥービエリト 陛下にお仕える侍従、アリエクサーン

ドウル・スエルゲイエヴィツチ・プーシキン。対する相手

は、騎兵隊中尉、男爵イエゴール・オースイッパヴィツチ・

ダンテース。父親のゲツケレン男爵に宛てて、プーシキンは

挑戦的な手紙を書きました。その下書きの写しを手に入れて<sup>26</sup>

おります。

ニカライー一世 手紙を読むんだ。

ドゥービエリト (読む。) 「これこそ父親が子供にやって

やれる父親らしい行為だ。女術、老練なボン引きの仕事。私

の妻に言い寄り、物陰に誘い、どの馬の骨に生ませたと

つかぬ、自分の息子の恋情を囁く。また息子が不名誉な病

気にかかり、家に臥せっている時に、その父親から出た台詞は・

・「ここは省略。」「・・・私はもう、妻には聞かせたくない、

放蕩息子に踊らされている父親の戯言(たわごと)を・・・」

省略。」「・・・それでもご子息は小生の妻に言い寄られた。

即ちこれはかの馬鹿息子が、やくざな破廉恥漢であることを

示しており、小生はここに正式に・・・」

ニカライ一世 哀れな最後を遂げることになるな、貴奴は言っておくぞ、ベンケンドールフ。きつと哀れな最後だ。今からでも見えるようだ。

ベンケンドールフ あの男は、陛下、何かと言つとすぐ「決闘」と来る男でして。

ニカライ一世 ゲツケレンが奴の妻に近づいたというのは本当か。

ドゥービエリト（紙片を見ながら。）本当です、陛下。昨日はヴァランツォーヴァ家の舞踏会で。

ニカライ一世 公使の地位にいながら・・・許せよ、ベンケンドールフ。このような厭わしい仕事をそちに託さねばならんとは。全く腹立たしい。

ベンケンドールフ 小生の義務でございます、陛下。

ニカライ一世 プーシキン、薄汚い人生を送ってきた男なのだ。子々孫々、あの汚点を洗い流すことは出来ぬぞ。どんなことをしようと。決して。あいつの詩には「時」がその報いを与えるのだ。言葉に対するあのような才能を、国家の栄光にはなく、恥部にのみ向ける。（なんて奴だ。）死にざまは無残なものだぞ、きつと。キリスト教徒として死ぬことは出来まい・・・決闘者は法に従つて厳正に処分するのだ。いいな（立ち上がる。）お休み。見送りは不要だ、ドゥービエリト。長居をした。もう寐る時間だ。

（ベンケンドールフと共に退場。）

（暫くしてベンケンドールフ、帰つて来る。）

ベンケンドールフ 気高いお心であらせられる、陛下は。

ドゥービエリト はっ。全く。

（間。）

ベンケンドールフ で、決闘の処置は？  
ドゥービエリト ご命令通りに、閣下。

（間。）

ベンケンドールフ ピストル所持、決闘の現行犯として逮捕すべく人を配置するように。ただ、よく注意してくれ。場所の変更があり得るぞ。

ドゥービエリト 畏まりました、閣下。

（間。）

ベンケンドールフ ダンテースの腕は？

ドゥービエリト 十歩の距離で、スベードのエースを。

（間。）

ベンケンドールフ 陛下もお可哀相に。

ドゥービエリト はっ。全く。

（間。）

ベンケンドールフ（立ち上がりながら。）人間の配置にはよくよく注意を払うんだ、ドゥービエリト。いいか、場所違いをしないようにするんだぞ、場所違いを。

ドゥービエリト 畏まりました、閣下。

ベンケンドールフ これで行くぞ。ゆっくり休むんだな、ドゥービエリト。（退場。）

ドゥービエリト（一人になって。）「・・・嵐を呼ぶ不吉

な雲が、低く空を覆っている。嵐で吹きだまつた雪を、つむじ風が、今度は丸く集める・・・」「場所違いをするな」か。つまく言つもんだな。「つむじ風が、今度は丸く集める・・・」

場所違いか。（ベルを鳴らす。）

(扉が小さく開く。)  
ドゥービエリト ラケーイエフを呼べ。

(暗転)  
(幕)

### 第三幕

(ゲツケレンのアパート。絨毯、絵、武器のコレクションあり。ゲツケレン、坐つてオルゴールを聴いている。ダンテース登場。)

ダンテース お早うございます、お父さん。

ゲツケレン あ、お前か。お早う。さ、こつちに。坐るんだ。長いこと見なかったな。私は淋しかったよ。何か悩んでいる顔だな、その顔は。話してくれないか。お前がこんな風だと、この私までが苦しくなってくる。

ダンテース *J'etais tres fatigued ces jours-ci.* (この頃どうも疲れがひどいのです。)(憂鬱病です、きつと。もう三日も続け吹雪。百年ここに住んでも、この天候には慣れることは出来ません。やけくそですね、僕など。雪が飛んで、あたり一面、白いだけ。)

ゲツケレン 塞ぎの虫に取りつかれているんだ、それは。下らん。

ダンテース 雪、雪、雪。何て退屈なんだ。通りに狼が出て来てもおおしくない天気。

ゲツケレン 私はこれに十四年も付き合つて来て、もうすっかり慣れた。 *Il n'y a pas d'autre endroit au monde, qui me donne, comme Petersboug, le sentiment d'etre a la maison.* (寛いだ気分

になれるのは、このペテルスブルグだ。他の街ではこうはいかない。) 退屈が始まると、私は人から離れて、一人で閉じ籠もる。そして考える。するとたちまち退屈は吹っ飛んでしまふ。ほら、聴いてご覧。実に良い音だ。今日求めて来たものだ。

(オルゴールを鳴らす。)

ダンテース お父さんのその情熱が分かりませんね。こんながらくた。

ゲツケレン いやいや、がらくたではない。女が着物(ドレス)を欲しがるように、私はこういうものが好きなので、どうなんだ、お前は。

ダンテース どうも気分が塞いで。

ゲツケレン 何故あんなことをやったんだ、ジョージ。二人だけで波風の立たない静かな生活を送っていたじゃないか。28

ダンテース 馬鹿なことを言わないで、お父さん。僕がイェカチエリーナと結婚しないわけには行かないのを、お父さんだつてよくご承知の筈じゃありませんか。

ゲツケレン そこなんだ、私の言いたいのは。お前のその、女に夢中になる癖、そのお前の癖のせいで、この家の屋台骨もぐらついてきている。(それが分からないのか。)(この家に女がやって来る。その度毎に、私はこの家から追い出されるんじゃないかと不安になる。私はお前を失い、その代わりにこの家に入つて来るものは、妊娠した女、通りの喧騒、噂、噂、だ。私は女は嫌いだ。

ダンテース *Ne croyez pas de grace que j'aie oublie cela...* (そんなことが僕に分かつていないと) どうか思わないで下

さい。(よく分かっているんです、僕には)

ゲッケレン この親不孝もの奴が！ 家庭の平安をお前は  
目茶目茶にしたのだ。

ダンテース お父さん、(大抵にして下さい。)(うんざり  
です、説教は。今までのこと全て、最後には結局、くしゃく  
しゃになって消えて行ったじゃありませんか。(今度だって・  
)

ゲッケレン フン、それなら、今度の話もう不満はない  
んだな。お前はあの女に会えた。望みは達せられたのだ。  
(お前はお前さえ良ければいいんだ。)私のことなどどうで  
もいいんだからな。私以外のどんな人間だって、お前にはとっ  
くに背を向けていたろうよ。

ダンテース ナターリアをパリに連れて行くんだ、僕は。

ゲッケレン 何だって？ ああ、何という。さすがの私も、  
お前がそこまでやるとは思っていなかった。お前にはそれが  
どういうことか分かっているのか。お前は私の心の平安を奪  
うだけではない、この生活全体を粉微塵にしようとしている  
のだ。妊娠している妻を見捨てて、その妹を奪い去って駆け  
落ち！ 獣(けだもの)だ。この私はどうなると思っ  
ているんだ。積み上げてきたこれまでの経歴、全て終わりだ。水の  
泡だ。いや、信じない。私は信じないぞ。そんなお前の冷酷  
で残忍な仕打ちを。何ていう自己愛だ。自分勝手な！ その  
愚劣さがお前には分からないのか。

(扉にノックの音。)

ゲッケレン 何だ。

下僕(入って来て、手紙を渡す。)(旦那様に。)(退場。)

ゲッケレン ちょっと待っていてくれ。いいな？

ダンテース ええ。

(ゲッケレン、手紙を読む。それをダンテースに渡す。)

ダンテース 何ですか。

ゲッケレン 言わんこつぢやない。読んでみる。

ダンテース(読む。)(なるほど。

(間。)

ゲッケレン あいつめ、何ていう奴だ。自分の相手が誰か、  
一体分かっているのか。よし、あいつは抹殺だ。必ず破滅さ  
せてやる。・・・この私に向かつて・・・

(間。)

ゲッケレン 酷いことになったぞ、これは。全く酷いこと  
に。お前だ、お前の蒔いた種だ。

ダンテース それは八つ当たりです、お父さん。当たるべ  
き相手はあちらでしょう？

ゲッケレン あいつは気違いだ。獣(けだもの)だ。ジョ  
ルジュ、お前は私の私をあの決闘気違いの手に渡したんだぞ。

ダンテース 早まらないで、お父さん。(窓の傍に行く。)  
人のやる事・・・どうせ最後は死んで終か・・・この手紙の  
主役はお父さんじゃありません。どうもこの男は文章がなっ  
てない。これでよく自分を文学者だなど思っているものだ。  
以前から僕は気づいていたのです。あいつは文章がなってい  
ないと。

ゲッケレン そんなことを言って一体何になるんだ。くだ  
らない。(それより)何故お前はあいつの家に行ったのだ。  
その結果私が演じる嵌めになったその役を考えてみたことが

あるのか、お前は。あいつはもう既に一度、我々に襲いかかったことがある。あいつの剥き出した歯、あれを私は未だに忘れることが出来ない。何故お前はあの女にちょっかいを出したがるのだ。

ダンテース 愛しているからです。

ゲッケレン 何が愛だ。快樂を漁っているだけじゃないか。

反論は許さん！ しかし、こうなった今どうすれば……決闘を挑むのか、あいつに。しかし陛下に顔向けが……たとえ何か奇跡が起ってあいつを倒すことが出来たとしても……ああ、どうしたものか。

(ノックの音。下僕、ストウローガノフを導き入れる。ストウローガノフは盲(めくら)。下僕退場。)

ストウローガノフ *Mille excuses.* (どうぞお許しを。) お許し下さい、親愛なる男爵。食事の時間にすっかり遅れてしまいました。しかし、お聞き下さい、あの音。どうなっているのでしょうか……こんなに吹雪く日は全く生まれて初めてです。

ゲッケレン どうぞどうぞ、伯爵。(遅刻だなどと、) 何時いらして戴いても大歓迎です。

ストウローガノフ (ダンテースの手を、手で触れて見つけて。)  
(これはお子様のゲッケレン男爵ですな。あなたの手は覚えておりますよ。しかし、これは冷たい。氷のようだ。何か心配事がありますな。)

ゲッケレン 私に、伯爵、災いが降りかかって来たのです。どうか私共にお力を、お知恵をお授け下さい。たった今、ジョルジュと私を憎んでいる男から酷い手紙を受け取ったのです。

ダンテース お父さん、まずいです、その手紙を公表するのは。

ゲッケレン いや、お前の口出しは無用だ。これは私宛ての手紙なんだから。それに伯爵は私の友人だ。実はブーシキンからのものなのです。

ストウローガノフ あの、例の？

ゲッケレン そうです。我々を憎んでいる者達の、根も葉もない噂、それがこの飛んでもない、馬鹿馬鹿しい言いがかりの原因なのです。嫉妬深い、あの気遣いは、このダンテースが、あの男の妻に懸想したと勝手に想像し、侮辱に対しては侮辱でお返しをと、私に悪口雑言の手紙を超越したのです。

ストウローガノフ 私には姪がおりましてな、美人になる素質は充分あったのですが、今ではどうですか、私にはその自信がなくなりましたな。

ゲッケレン 聴いて戴きたいと先程お願い致しましたあの男の手紙、汚(けが)らわしい言葉で満ちており、お聞かせするのも憚られるようなものですが……(読み上げる。)

「……これこそ父親が子供にやってやれる父親らしい行為だ。女術、老練なポン引きの仕事。私の妻に巧妙に言い寄り、物陰に誘い、どこの馬の骨に生ませたともつかぬ、自分の息子の恋情を囁く……汚れない母親の名前を、何ていうことだこの男は、腹立ち紛れに汚泥の中に放り込むとは。ジョルジュを私が唆(そそのか)したなどと、一体誰があの気違いに吹き込んだのだ。この先の方に、ジョルジュが忌まわしい病気に掛かっていると書いてある。あの子にそれは酷い罵詈雑言を浴びせています。ああ、私はこれ以上お聞かせする

ことは出来ません。

ストウローガノフ ロシヤの貴族が書いたのではありません、それは。ああ、何という時代、何という放埒か。親愛なる男爵、あの男が決闘の手袋を投げつけたのは、男爵に對してのみではありません。あのような手紙を王の代理人ともある人物に書いて寄越す。これは社会に對する挑戦です。カルボナリ党员です。男爵、これはいけません。危険な手紙ですぞ、これは。

ゲツケレン どうしたらいいでしょう、私は。あの男に決闘を申し込むべきなのでしょう。王の代理人なる地位にあるこの私が。ああ、伯爵、私はもう駄目です。何かよい策を。どうか。決闘しかないのでしょうか。

ストウローガノフ いや、それは……

ゲツケレン 毒のある野獸のように襲いかかって来た。

(一体何のもりなのだ。) 息子の方は口実になるようなことを全くしていません。

ストウローガノフ こんな手紙が来た今となつては、口実を与えたの与えないだの、問題ではありません、男爵。とにかくあなたが決闘するのは問題外です。息子が逃げたのだ。父親を代わりに出したのだと言われるだけです。

ダンテース 私について、人が何と言つと仰いましたか。

ストウローガノフ いやいや、人に何も言わせるものじゃありません。私に策が……(ゲツケレンに。) 返事はこうなされるのです。ダンテース男爵が貴殿に決闘を申し込む、と。

そしてご自身についてはただ一言…… 請い願わくは、当方の身分官職に多少の敬意が払われんことを、と。

ダンテース 分かりました。そのように。

ゲツケレン よし、そのように。伯爵、心から感謝致します。すっかりご好意に甘えてしまいました。しかしどうかお許しを。降つて湧いたこの侮辱、その重さを御配慮下さいませように。さ、伯爵、食事の用意が出来ております。

(ストウローガノフを導き、退場。)

(ダンテース、一人残る。突然オルゴールの箱を取り上げ、床に投げつける。呻くようなオルゴールの音。ダンテース、ピストルを取り出し、狙いもつけず、絵にぶつ放す。ゲツケレン登場。)

ゲツケレン 何をする！ ああ、心臓が！

(ダンテース、黙つた儘向きを変え、立ち去る。)

(暗転。)

(暗闇から、冬の日没の、赤紫色の太陽が見えて来る。光線が雪の吹き溜まりに当たっている。アーチ型の橋。静寂。無人。暫くして橋にゲツケレン登場。我に無い様子。何かを遠くに見つけようとする目つき。もう少し先に進もうとする。その瞬間、ピストルの発射音が届く。あまり大きな音ではない。ゲツケレン立ち止まる。橋の欄干に縋る。間。再びあまり大きくないピストルの発射音。ゲツケレンうなだれる。間。)

(橋にダンテース登場。軍用外套を片方の肩にのせている。外套は(持つ場所が悪く、)地面にまで垂れ下がっている。フロックコートは血と雪に塗(まみ)れている。その片方の袖が千切れている。ハンカチで片手が包帯されており、ハンカチは血に染まっている。)

(

ゲツケレン 神様、ああ、神様。有り難うございます。  
(十字を切る。さ、私に凭れて。このハンカチでそこを。

ダンテース いらぬ。欄干に縋る。唾を吐く。血が混  
じっている。)

ゲツケレン 胸か。胸を狙われたのか。

ダンテース あの男、狙いは良かった。ただ運がなかった。

(ダンゼース、橋を渡って登場。)

ダンゼース あの馬車はお宅の？

ゲツケレン そう。そうそう。

ダンゼース 相手方の方に廻して戴けないでしょうか。

ゲツケレン ええ、いいです。

ダンゼース 馭者！ おい、お前。乗るんだ、馬車に。降

りて行くんだ。下に道がある。何だその目は。馬鹿者！ 見

せ物じゃない！ 早く行け。野原に通じる道がある、下に。

(橋から走り降りる。)

ゲツケレン (小声で。) で、あいつは？

ダンテース もう何も書かない、あの男は。

(暗転。)

(闇の中から冬の日没。日がまさに落ちんとする時間。プー  
シキンの部屋。書斎の暖炉の傍の長椅子にニキータ、眼鏡を  
掛けてノートを見ている。)

ニキータ (読む。)(「この世に幸せはない。」「・・・そう、

ここには幸せはない。」「しかし平静と自由がある。」「ないな  
い。平静も自由も。毎日毎日、一睡も出来ないでいて、何が

平静がある、だ。「私、この疲れた奴隷は、逃亡をもくろん

でいる。「逃亡？ 何処へ、何をもくろんで。

(ビトゥコーフ登場。)

ニキータ 「私、この疲れた奴隷は、逃亡をもくろんでい  
る。「分からない、何のことが。

ビトゥコーフ 「遠い使役と喜びに。」「・・・今日は、ニ  
キータ・アンドウレイエヴィツチ。

ニキータ この詩の続き？ どこで覚えて来た？

ビトゥコーフ 昨日。シエピエリエーフスキーのお屋敷に

行ったんだ。ジュコーフスキーさんの望遠鏡を直しにね。そ

の時みんなに丁度その詩を読んで聞かせていらしたから。

ニキータ ああ、そう。

ビトゥコーフ みんないい詩だって言ってた。深いんだっ

て。

ニキータ うん、深い。深いよ、この詩は。

ビトゥコーフ それでその詩の作者、その人は？

ニキータ ドライヴだ。ダンゼースさんと。多分山の方に。

ビトゥコーフ ダンゼースさんと？ 軍人じゃないか、あ

の人。大佐の。それでこの時間まで戻って来ない？・・・そ

れは・・・

ニキータ 何だい、その興奮の仕方は？ 一杯やって来た

のか？

ビトゥコーフ いや、とにかく遅いのが心配なんだ。もう

食事の時間なんだろう？

ニキータ 何を言ってるんだ、お前。お前、夕食にでも招

待されているのか、うちに。それより書斎の時計でも見て呉

れ。一体何を直したんだ？ 一時を指しているのに、十三回



鳴ったぞ。

ピトウコーフ 見る見る。ちゃんと直す。隅から隅まで。  
(書齋の奥へと退場。)

(玄關のベルが鳴る。食堂を通過して客間にジューコーフスキー  
登場。)

ニキータ 閣下、これは。

ジューコーフスキー どうした、ドライブだと？ 家にいないのか。

ニキータ ガンチャローヴァ様一人で・・・お子様方は  
乳母がお連れして、侯爵様宅へ。

ジューコーフスキー どうなっているんだ、これは一体。お  
前に訊いているんだ、ニキータ。

(ガンチャローヴァ登場。)

ガンチャローヴァ まあ、なんて嬉しいんでしょう、ジュー  
コーフスキー様。よくいらつしやいました。

ジューコーフスキー 今日は、ガンチャローヴァさん。ちよつ  
とどうなっているのですか、これは。私は子供じやないん  
です。

ガンチャローヴァ お顔の色がお悪いわ、ジューコーフスキー  
様。どうかなさったのですか。どうぞ、お掛け下さい。

ジューコーフスキー *Ma santé est gâtée par les attaques de nerfs.*  
(神経を使い過ぎて、体までやられてしまったのです。) そ  
れもこれもみんな彼のせいだ。

ガンチャローヴァ まあ、あの人のせい？

ジューコーフスキー そうです。考えても見て下さい。昨日  
気が狂ったような勢いで馬車を飛ばしている男がいる。誰か

と思えばプーシキンだ。それが窓から顔を出して大声で、  
「今日は駄目になった。何えない。明日僕の家へ来て呉れ。」  
と怒鳴る。私は仕事をうつちやってここへ来て見る。すると  
どうだ、ドライブにお出かけだと？

ガンチャローヴァ どうぞ許して上げて、あの人を。お願  
いです。きつと何か、何か、ちよつとした行き違いがあつ  
たんですわ。そう、あの人にあんなによくして下さつて、いっ  
ぱいキスして上げなくちゃいけないんだわ。

ジューコーフスキー いっぱいキスなど真つ平・・・あ、こ  
れは失礼、つい我を忘れて・・・優しいキスにはこの何年見  
放されている！ 私が奔走しているのは一体何の為だ！ 全  
く。私がやつとのことと何とかを丸く収めようとする。

と、彼が出て来てぶち壊すのだ！ しかし知性はまだやられ  
ていないようだ。だからもし今度また馬鹿なことをやらかし  
たら、もう我慢はならない。一発食らわすまでだ。

ガンチャローヴァ 何があつたんですの？ ジューコーフス  
キーさん。

ジューコーフスキー 陛下が彼のことを怒っていらつしやる  
のです。何つてこれですよ。一昨日、舞踏会の時、陛下は・・・  
ええい、どうお話すれば・・・こちらまで顔が赤くなつて来  
る。陛下はご覧になったのです。彼が黒のフロックコートに  
黒のズボンで田柱の傍に立っているのを。ちよつと失礼、ガ  
ンチャローヴァさん。ニキータ！

(ニキータ登場。)

ジューコーフスキー 御主人様にお前、何を着せたんだ、舞  
踏会の時。

ニキータ フロックコートです。

ジュコーフスキー それが駄目なんだ！ 文官服、文官の制服だ、そういう時は。

ニキータ 御主人様の御命令です。制服はお嫌いだと仰つて。

ジュコーフスキー 嫌いだらうと何だらうと構わん。旦那様もパジャマで行きたいと言ったら、お前はどつするんだ。こついうことはお前の仕事なんだ、ニキータ。いいか。よし、下がつてよい。

ニキータ ああ、何たること。まことにどうも・・・

ジュコーフスキー いい恥晒しだ。陛下はフロックコートがお嫌いなのだ。我慢がならないと思つていらつしやる。

(それなのに着て行くとは。彼にはそんな権利はない！制服を着る他はないんだ！ 全く何様だと思つているんだ。不作法な！ わざわざフロックコートで！ おまけに退役したいなどと言ひ出したそうじゃないか。選りによつてこんな時に。退役に値する何をやつたと言つんだ。何もしていないこんな時期に！ 大見得を切つた歴史書はどうなつたのですか。出来たんですか。何もやつてないじゃないですか、ガンチャローヴァさん。それに彼が新しく書いた詩についてまた人が噂をし始めました。前の時のあの成り行き、覚えていらつしやいますね・・・鼻唄の引き倒し、余計な取り巻きが多すぎるんです。これがまた拡がつて、大変なことになつて仕舞うんです！

ガンチャローヴァ ああ、何て恐ろしい話なんでしょう。

でもあの人、最近何か酷く心配な様子で、それがもとで、体

の具合も悪いんです・・・私、こつやつてちよつと目を瞑(つぶ)ります。すると、奈落の底に落ちて行くよつな気持ちになるのです・・・ああ、何もかも、こんがらがつて・・・ジュコーフスキー こんがらがつたら解(ほど)かなければいけないのです。馬鹿なことなんですから、全く。陛下は優しい心の持主です。でも怒らせてはいけません。怒らせては。どうか、ガンチャローヴァさん、妹さんにお話し下さい。一旦陛下の不興を買えば、二度と取り返しはつかないと。

ガンチャローヴァ ご親切に。何とお礼を申し上げたらよいか・・・

ジュコーフスキー お礼、お礼 (お礼が何になりますか) 私は彼の乳母ではないんですからね。好きなように勝手に人を傷つけばいいんです。結局傷つくのは自分なのです。・・・34

これで私、失礼します、ガンチャローヴァさん。

ガンチャローヴァ いいえ、いいえ、どうかもう少し・・・今お帰りだなんて、どうして・・・もう少しいらして。あの人もすぐ帰つて来ます。本当にすぐ・・・

ジュコーフスキー あの男に会つつもりなどありません。それに時間もありませんし。

ガンチャローヴァ どうかお怒りを解いて。よく言つて聞かせれば、あの人だつて・・・

ジュコーフスキー もう結構。うんざりです。 En cette dernière chose je ne compte guere. (その最後のこと・・・言つ

て聞かせれば直る・・・など) もう私の仕事じゃありません (

(扉に進む。ピアノの上に本が積み重ねてあるのを見る。)

この本は見たことがない。新版のアニメーキンですか？ それはい。

ガンチャローヴァ 今日印刷所から届きました。

ジュコーフスキー それはいい。いや、それは良かった。

ガンチャローヴァ 私、もうその本で占って見ましたわ。

ジュコーフスキー 本で占う？ どうやるのかな。では占いを。私にも。

ガンチャローヴァ ではどうぞ。どこかページを。

ジュコーフスキー 百四十四ページ。

ガンチャローヴァ で、行は？

ジュコーフスキー 十五行目。

(ピトウコーフ、部屋の暖炉のところに現れる。)

ガンチャローヴァ (読む。)  
「異なる願いが声を上げ、私はその声を知った。」

ジュコーフスキー 私が？ ああ、そうだ。

ガンチャローヴァ 「新たな悲しみを知ったのだ。」

ジュコーフスキー そう。その通りだ。

ガンチャローヴァ 「最初の希望は消えて行き・・・」

ピトウコーフ (囁く。)  
「古い後悔で胸は疼く。」

(ピトウコーフ、書齋へ退場。)

ジュコーフスキー で、次は？

ガンチャローヴァ 「古い後悔で胸は疼く。」

ジュコーフスキー 心の中のごちゃごちゃした所から、彼はどうやって纏まった考えを切り出せるのか。そしてそれに対応する形のある言葉を、どうやってあんなにうまく見つけて来るのか。ああ、空を駆けめぐる男、あの熱い血潮・・・

恩知らずの馬鹿者！ 鞭打ちだ！ ちゃんと行儀を教えなきゃいかん！

(黄昏。部屋が暗くなってくる。)

ガンチャローヴァ では今度は私に。

ジュコーフスキー ページは？

ガンチャローヴァ 百三十九。

ジュコーフスキー 行は？

ガンチャローヴァ やはり十五行目。

ジュコーフスキー (読む。)  
「面白い、寸鉄人を刺す箴言で、間違っている敵をやつつけるのは・・・」

(プーシキナ、扉のところに登場。立ち止まる。)

ジュコーフスキー 「違うな。(読み方が。)面白い。寸鉄人を刺す箴言で間違っている敵をやつつけるのは・・・いや、それよりも、黙って彼に墓穴を用意して置く、こちらの方が面白い。」  
ああ、ガンチャローヴァさん、これはあなたの運勢とは関係ありませんでしたね。あつ、ナターリヤ・ニカラーイエヴナ、失礼しています。すみません、大きな声を出して詩を読んだりして。」

プーシキナ 今日、ジュコーフスキーさん。お会い出来て嬉しいですね。どうぞお気のすむまでお読みになって。私、詩は嫌い。あなたのは別ですけど。

ジュコーフスキー ナターリヤ・ニカラーイエヴナ。どうか、そのようなことは・・・

プーシキナ いいえ、あなたのは別ですわ、ジュコーフスキーさん。Votre dernière ballade m'a fait un plaisir infini...

(ついこの間のお作、素晴らしいものでしたわ。)

ジューコーフスキー 聞こえません、私には、そのようなお話は・・・

(書齋で時計が鳴る。)

ジューコーフスキー (あ、もう。) 私は皇太子様のところへ参らねばなりません。Au revoir, chere madame, je m'apperois, que je suis trop bavard... (では失礼します、奥様。さつやら私お喋りが過ぎたようでした・・・)

プーシキナ どうぞお食事を、御一緒に。

ジューコーフスキー お言葉、有り難うございます。しかし、行かねばなりませんので・・・Au revoir, mademoiselle (失礼します、ガンチャローヴァさん。) どうか、彼に先程のことを、あ、お見送りは結構です。(退場。)

(暗くなる。)

ガンチャローヴァ ジューコーフスキーさんはね、ターシャ、あの人が舞踏会にフロックコートを着て行ったため、陛下に不興を買ったという話をしに来たのよ。

プーシキナ どうでもいい話 止めときなさいって私、言ったんだけど。

ガンチャローヴァ あなた、どうしたの？

プーシキナ ほっといて頂戴。

ガンチャローヴァ あなた分かってないの、こんな不愉快なことが起こっているのは、みんなあの人が不幸だからなのよ。あのフロックコートの話で、この家に不幸が降りかかるかも知れない。それなのにあなた、平気な顔をしているのね。

プーシキナ 何故なのかしら、私が不仕合わせかどうかについていうことは、誰も、決して訊いてくれたことがない。私に

言う言葉、それは何時だって、お前が悪い、ああしろ、こうしろ。でも私のことを今までに誰か、哀れんでくれたことがあるかしら。これ以上私に何をしろって言うの。私はあの子供を生んだ。そしてじつと我慢して詩を聞いた。来る日も来るも、じつと・・・さ、詩を読めばいいでしょう。ジューコーフスキーさんはそれで幸せ。ニキータも幸せ。そしてあなたも幸せ。・・・でも、ほっといて頂戴、私だけは。

ガンチャローヴァ 心が邪(よこしま)なの、あなたの心は！ 私には分かるわ、あなたはあの人を愛していないの。

プーシキナ あの人をこれ以上愛するなんて、私には到底無理だわ。

ガンチャローヴァ あーあ、あなた、そんなのね。可哀相、あの人、あなた、それにその家族。

プーシキナ でもね、でも・・・(間。) これだけは言うておくわ。今日だって私、あの人と会う約束になっていた。でもあの方は来なかった。淋しかったわ、私。

ガンチャローヴァ そつ。あなた、自分で詩いた種なの。

プーシキナ 一体お姉さん、何が不満なの？ あの人が孤独ですって？ ちゃんとお姉さんという人がいるじゃない。

私にそれを見抜く目がないとでも仰るつもり？ (指を目のところ持つて来る。)

ガンチャローヴァ あなた、気でも狂ったの！ 許しませんよ、そんな言い方！ 何ですか、本当に！ 私、あの人可哀相なの。みんなから捨てられて。それだけ。

プーシキナ さあ、見て。私の目を。しっかりと。

ニキータ(扉のところへ登場。) ダンザース大佐がお目に

かかりたいと。

プーシキナ お断りして。お会い出来ませんと。

ダンザース（軍用外套を着た儘、登場。）お許しもなく上がりました。私をお断りになる訳には参りません。アリエクサンドゥル・プーシキンをお運びしました。怪我です。

（ニキータに。）何を突つ立っているんだ。運ぶのを手伝うんだ。ただ、揺らすな。静かに運べ。

ニキータ ああ、聖母マリア様！ ガンチャロヴァ様！ 大変なことに！

ダンザース 大きな声を出すな。いいか、静かにだぞ。

（ニキータ、走って退場。）

ダンザース あかりを。ここに。

（プーシキナ、坐った儘動かない。）

ガンチャロヴァ あかりを！ あかりを！

（ピトウコフ、書斎の扉のところに登場。手に火のついた燭台を持っている。）

ダンザース 急いで！ 運ぶのを手伝うんだ！

（ピトウコフ、燭台を持って走り去る。別の扉から小間使いが蝋燭を持って登場。ピトウコフ、玄関に直接続く扉の方に燭台を持って走って入る。その後ろを、薄暗がりの中を、一群の人々が誰かを書斎の奥に運び込むの見える。ダンザース、すぐ書斎へ通じる扉を閉める。）

プーシキナ プーシキン、どうしたの、あなた。

ダンザース 入ってはいけません、どうか。包帯が終わるまでは入るなどのご命令です。それから静かに。声を上げてはいけません。余計な心配をかけます。（ガンチャロヴァ

に。）自室にお連れして。これは命令です。

プーシキナ（ダンザースの前に膝まついて）私じゃない！ 私のせいじゃないわ。お願い。どうか、私のせいじゃないつて・・・

ダンザース 静かに！ さ、連れて行って。

（ガンチャロヴァと小間使い、プーシキナを奥の部屋へと連れ去る。ピトウコフ、書斎から走り出て来る。そして、後ろ手に扉を閉める。）

ダンザース（金を取り出し。）（ミリオーンスイ通りに。馬車で行くんだ。いくらぶっかけられても構わん。医者を呼んで来るんだ。アーレント先生を。直ぐに来て貰うよう。アーレント先生がいけない時はしょうがない。医者なら誰でもいい。直ぐに連れて来るんだ。）

ピトウコフ 畏まりました。行って参ります、大佐殿。

（窓の外、通りに、軍楽隊の演奏が聞こえる。）

ピトウコフ（窓に駆け寄る。）ああつ、こりゃ駄目だ。軍隊の行進だ。これじゃ通らせては呉れない。裏口から、庭を抜けて行こう。（走り退場。）

（ガンチャロヴァ登場。）

ガンチャロヴァ ダンテースとなの？ 本当のことを言つて。あの人の傷、どうなんです？

ダンザース 重傷です。命も危ない。

（暗転。）

（幕）

(夜。プーシキン家の居間。鏡は全部布で覆われている。何かの箱、藁、小さな椅子が入れられ、その上に外套姿の儘ダンザースが寝ている。扉は全て閉まっている。通りから時々、群衆のガヤガヤ言う声が聞こえて来る。ジュコーフスキー、足音をしのばせて入って来る。蠟燭、それに封印の為の蠟、それに印鑑を持っている。ピアノの上に蠟燭を立てる。窓のところへ行き、外を覗く。)

ジュコーフスキー ああ、まったく。

ダンザース えっ？(起き直って。) ああ、夢を見ていました。嘗倉に入れられている。まあ、そりやそうだな。正夢に近い。

ジュコーフスキー ダンザースさん、必ず私から陛下に取りなして、何とかします。

ダンザース いや、お気持ちは有り難いですが、どうかお構いなく。法による裁きに任せることにします。(肩章を探つて。) お前ともお別れだな。前線へ出動だ。コーカサスへ。ジュコーフスキー ちょっと外をご覧下さい、大佐殿。群衆がどんどん増えています。誰がこんな事態を予想出来たでしょう。

ダンザース 実際そうですな。呆れるばかりです。

(奥の部屋の扉が開き、プーシキナ登場。彼女について、小間使いも。)

小間使い 奥様、どうかお部屋にお帰り下さい。奥様、どうか！

プーシキナ(小間使いに。) お下がりにさい。

(小間使い、距離をとって立つ。)

プーシキナ(書斎の扉に。) 私、入っていいわね、プーシキン。

ダンザース これは！ いけません、奥さん！

ジュコーフスキー(通り道を塞いで。) ナターリア・ニカライエヴナ、どうかお止めになつて！

プーシキナ なんて馬鹿な大騒ぎ！ たいした怪我でもないので……。あの人、死にはしない。ただ、もう少し沢山モルヒネを取らねばいいのよ。痛みを和らげる為。そしてすぐ、今すぐ、家族全員揃つて出て行くの。パラトウニャーヌイに。引越しの荷物、どうしてまだ出来ないんだろう。

「面白い。寸鉄人を刺す箴言で間違っている敵をやつつけるのは……」面白い……面白い……黙った儘……忘れた、全部忘れたわ。ああ、あなた、私に、入っていいって仰つて……

ジュコーフスキー どうか止めて、ナターリヤ・ニカライエヴナ。

ダンザース ジュコーフスキーさん……(食堂の扉から医者を呼ぶ。) ダーリ先生……

(ダーリ登場)

ダンザース どうか先生の方からも……

ダーリ 奥さん、ここで奥さんの出来ることは何一つありません。(ピアノの上にある小さなガラス瓶を取り上げ、杯に薬を注ぐ。) さ、どうぞ飲んで下さい。

(プーシキナ、杯を押し退ける。)

ダーリ 何にもなりませんよ、そんなことをしても。さ、飲んで。楽になりますから。

プーシキナ 私の言うことを誰も聞いてくれないのです。聞いて下さいませぬ。

ダーリ どうぞ。

プーシキナ あの人、痛みは？

ダーリ いいえ。痛みはもうありません。

プーシキナ もう痛まなくなつた？ 駄目よ、私を脅かそうとしたつて。卑怯よ、私を脅かそうとして。卑怯よ。お医者様でしょうか？ 助けて下さらなくつちや。あ、でもあなた、お医者様じゃないわ。お話作家。あなたはお話を書くの……私、お話はいらない。人の命を救つて。（ダンザースに。）

この人を連れて来たのはあなたなのでしょう？ それなら……

ダーリ さ、一緒に行きましょう。さあ。

（小間使い、プーシキナの腕を抱えるように取る。）

プーシキナ 「面白い。寸鉄人を刺す箴言で……」忘れてしまつた。夫のことなんか信じない、私。

（ダーリと小間使い、プーシキナを連れ去る。）

ダンザース 私に何が言いたかつたんでしよう、あの人。

ジュコーフスキー あんな人の言うことを気にしちやいけません、ダンザースさん。可哀相な女なんです。今にみんなに八つ裂きにされてしまいますよ。

ダンザース 本来なら、あの男をそのまま逃がすような私じゃありません。信じて下さい。その場で決闘を申しこんでいたところなのです。プーシキンが止めたのです。しかし、決闘にも何も、明日にでも嘗倉行き身では。

ジュコーフスキー 止めて下さい、そんなことを仰るのは、もうこれ以上不幸は御免です、ダンザースさん。終わったの

です全ては、これで。

（閉まつた扉の後ろから非常に低く、静かな合唱の音が聞こえる。ダンザース、食堂に通じる扉を通つて行き、

後ろ手に扉を閉める。中の部屋からガンチャローヴァ登場。窓のところに行く。）

ガンチャローヴァ あの人（プーシキン）にはもうこの景色、見えてないわ。

ジュコーフスキー いえ、見えますよ、ガンチャローヴァさん。

ガンチャローヴァ 私、もう妹とは顔をあわせません、ジュコーフスキーさん。これから着替えて外出します。辛いんですの私、ここに残っているのが。

ジュコーフスキー あの声に負けてはいけません。あれは暗い声です。妹さんを放つておいてはいけません。人々が、あの暗い声が、今に妹さんを噛み殺してしまいますよ。

ガンチャローヴァ そうやって私を苦しめて、それで一体どうなさるおつもり？

ジュコーフスキー 分かりました。さ、どうぞ。

（ガンチャローヴァ退場。）

ジュコーフスキー（合唱に耳を傾ける。）ああ、プーシキン、何なのだ、お前がやったことは……そう、全ては灰塵に帰すか……（坐る。ノートを取り出す。ピアノの上からペンを取り、何かを書き留める。）鋭い知性は輝くことなく……（韻文を作ろうとぶつぶつ呟く。）その瞬間、まるで幻覚のように目の前に現れた……僕は訊きたかつた、

一体君は何を見たのだ、と。

39

(静かにドゥービエリト登場。)

ドゥービエリト ご機嫌よう、ジューコーフスキーさん。

ジューコーフスキー 今日日は、將軍。

ドゥービエリト 書齋を封印なさる・・・そのおつもりですな？

ジューコーフスキー ええ。

ドゥービエリト あなたの方の封印は少々お待ち願います。

まづ私が入り、調べ、憲兵隊の封印をさせて戴きます。

ジューコーフスキー どういうことですか將軍、陛下は私個人に彼の原稿類の調査、封印を託されたのですが・・・私には理解出来ません。原稿類の調査は私個人の義務と心得ております。別の封印が必要とは、一体どういうことなのでしょう。

ドゥービエリト ほう、あなたの封印の隣に憲兵隊の封印が貼られるのは不快とでも仰るんですかな、ジューコーフスキーさん。

ジューコーフスキー お言葉ですが、しかし・・・

ドゥービエリト 原稿類は全てベンケンドール伯爵の検閲を受けねばなりません。

ジューコーフスキー 全て？ しかしあの中には個人的な書簡も含まれているのです。お願いです。これでは私は「密告者」の汚名を着なければなりません。私のこの名を汚そうと仰るんですか。唯一の私の清廉なこの宝、ジューコーフスキーという名前を。皇帝陛下に私はこのことを申し上げます。

ドゥービエリト 皇帝陛下の御意志に背いて憲兵隊が何かするともお思いですか。あなたただでなく、我々も検閲

を行う、それであなたが「密告者」の汚名を着ることになる、そんなことをお考えですか？ ジューコーフスキーさん。やれやれですな・・・誰かを傷つけるために、そんな込み入った手段を取るものですか、政府というものが。いえいえ、他人に害など。陛下のご意図は別のところに。さ、ジューコーフスキーさん。時間の無駄です。

ジューコーフスキー 分かりました。

(ドゥービエリト、燭台を持って書齋に入る。戻って来てジューコーフスキーに封蝋を渡す。ジューコーフスキー封印を始める。通りからガラスの割れる音、騒音が聞こえて来る。)

ドゥービエリト(小声で。)おい。

(内側の扉の重いカーテンが開いて、ピトゥコーフが現れる。)

ドゥービエリト 何者だ、お前は。(訳註 ジューコーフスキーに怪しまれない為。二幕二場参照。)

ピトゥコーフ 時計直しです、閣下。

ドゥービエリト ちよつと頼む。外へ出て見て来てくれ。

ピトゥコーフ 畏りました。(退場。)

(ドゥービエリト、扉に封印をし始める。)

ジューコーフスキー 彼の死がこんなに沢山の群衆を呼び集めることになる、誰が予期したでしょう・・・国中が喪に服しています。私の想像では、今日一日で約一万人・・・

ドゥービエリト こちらの調べでは四万七千人だ。

(間。)

ピトゥコーフ(登場) 誰か分かりませんが閣下、外で二人が怒鳴っています。外国人の医者がプーシキンをわざと死なせたのだと。そこに医者が出て来たので、誰かが煉瓦を投



げて街灯が壊されました。

ドゥービエリト ふん、そうか。

(ビトウコーフ退場。)

ドゥービエリト ああ、大衆。馬鹿な奴らだ。

(扉の外の合唱、急に大きくなる。)

ドゥービエリト(奥への部屋の扉に向かって。)

(おい、出動だ。)

(扉が開き、十人の憲兵、登場。軍用外套姿。手には軍帽。)

ドゥービエリト 棺の搬出だ、諸君。ラケイエフ大尉、搬出の指揮を取れ。それから大佐、君はここに残る。プーシキン夫人を(要請あれば)遅滞なくただちにお助けするよう、あらゆる手段をつくすこと。いいな。

(士官達、ラケイエフの後に続き、食堂に入って行く。一人大佐が残り、奥の部屋に戻る。)

ドゥービエリト それからジュコーフスキーさん、あなたにはプーシキン夫人に付き添って戴きたい。苦しんでいる人には慰めを・・・違いますか。

ジュコーフスキー いや、私も運ぶ方に回ります。(退場)

(ドゥービエリト一人。肩章と肩の飾り紐を直し、食堂の扉の方に進む。)

(暗転。)

(モーイカ。夜。街灯。薄暗く、チカチカとして今にも消えそう。プーシキンのアパートの外景。カーテンの後ろに明々と灯がついている。玄関。玄関の傍は静か。しかしそこから少し離れた場所では、群衆がざわめき、動揺がある。警官が

群衆を抑えている。突然学生の一団が現れ、玄関に突進しようとする。)

警察署長 下がるんだ、学生達。下がれ！ 進入はならん！

(一群の学生から喚声上がる。「何だ、何だ、これは。プーシキンは我等が詩人じゃないか。その遺骸に敬意を表するんだ。止めることなど出来ないぞ。」)

警察署長 下がれ！ イヴァニエーンカ。奴らを抑えろ。通すな。学生を通させるな。法規違反だ。通させるな！

(突然学生群の中から一人飛び出して、街灯に登り始める。)

学生(制帽を勢いよくさつと振りかざし。)

諸君、聞いてくれ！(一枚の紙を取り出し、それを見ながら。)

「高貴な詩人の魂は、けち臭い、下卑た中傷で名誉を汚されることに耐え得なかった・・・」

(群衆の騒音がピタツと止む。警官も驚き、動きを止める。)

学生 彼は立ち向かった。敢然と、一人で。社会の因習に反抗して。そして殺された。いつものように一人で。

(学生の群、「脱帽」と叫ぶ。)

警察署長 おい学生、お前、何をやってるんだ。

学生 「殺されたのだ。今さら何の役に立とう。号泣しよう」と、喪に服そうと、一斉に涙をこぼそうと。・・・この哀れな話を囁きあおうと・・・」

(警官の笛。)

警察署長 あいつを引きずりおろせ！

(群衆に動揺あり。女性の声「殺されたのよ!」)

学生 「そうだ。もともと君達じゃないのか、彼をまづ最初に追放したのは。」

(笛。警官、街灯に飛びつく。群衆の喚声。「逃げる」という声。)

衛兵 何をぼんやり突っ立っている。引つ捕らえるんだ!

学生 「蠟燭が消えるように、かの偉大な天才は消えた。」

(学生の声、群衆の声にかき消される。)  
「冷酷無残に下手人は一撃を下した。命を救う手だてはもうない。」(学生、逃げる。)

(叫び声「捕まえる!」。警官達、学生を追う。プーシキンの部屋の灯、消え始める。同時に、軍服を着た士官が、別の街灯に登る。)

士官 市民諸君! 今諸君が聞いた話、あれは全部真実だ。

プーシキンは故意に、計画的に殺されたのだ。そしてこの卑劣極まる殺人によつて、誰が侮辱されたか。それは我々国民なのだ!

警察署長 黙れ!

士官 この偉大な人間の死は何故起こったか。それは無制限の権力が、その任に相応しくない人間に与えられているからだ。そいつらが民衆を奴隷のように扱っているのだ。

(警官達、四方八方から高く笛を鳴らす。くぐり戸を開けて、ラケイイエフ登場。)

ラケイイエフ おい、早く引つ捕らえるんだ!

(憲兵達登場。士官、消える。この時、馬の足音が聞こえる。群衆から声「踏み潰されるぞ!」)

ラケイイエフ 野次馬を押し戻せ!

(玄関の前の場所、人がいなくなる。プーシキンの部屋の灯、全部消える。その代わりに、玄関の辺り、明々と灯がつく。

静かになると同時に、静かな悲しい歌が玄関の方向から聞こえて来る。また、最初の憲兵隊現れ、最初の蠟燭が出て来る。(暗転。)

(暗転。)

(静かな悲しい歌、だんだんと雪の音に変わってゆく。夜。荒れ果てた駅。蠟燭の灯。暖炉に火。駅長の妻、窓にしがみつくように顔を寄せ、吹雪の中を何かを捜すように覗く。窓の外、灯がちらちら光り、人声がする。最初に駅長が灯を手に登場。後ろから来るラケイイエフとアリエクス・ドウル・トゥルゲーニエフを導き入れる。駅長の妻、お辞儀。)

ラケイイエフ 誰か人がいるのか、この駅には。

(トゥルゲーニエフ、暖炉に突進、手を暖める。)

駅長 人は誰もおりませんです閣下、誰も。

ラケイイエフ この女は。

駅長 妻でして、はい。女房です、閣下。

トゥルゲーニエフ これは何だ。茶だな。すまんが一杯注いで欲しい。

ラケイイエフ 私にも頼む。ただ、早くやってくれ。一時間以内に馬だ。荷車の方は三頭立てでな。こっちの方は……二頭立てだ。

(トゥルゲーニエフ、熱い茶で舌を焼く。怯む表情。それから茶を飲む。)

駅長 三等立てはちよつと……閣下。

ラケイイエフ 一時間後だ。三頭立てだぞ。いいか。(コップを取って、茶を飲む。)

駅長 はい、畏まりました、閣下。

ラケーイエフ 小一時間、ちよつとベッドで休む。時計はあるんだな、ここに？ 一時間経つたら起こすんだぞ。いいですか？ アリエクサーンドル・イヴァーナヴィッチ。寝ましよう、一時間。

トゥルゲーニエフ ええええ。足も手も凍えて、まるで何も感じない。

ラケーイエフ 通りかかって来る者がいたら、必ず起こすんだぞ。それから、憲兵にも知らせる。いいな。

駅長 はい、畏まりました。

ラケーイエフ（駅長の妻に。）それからお前さんによく言っておく。窓から外を覗くんじやない。何も変わったものにはないんだ。分かったな。

駅長 はいはい、もうそんなことは決して……はい。どうぞ、こちらの綺麗な方にお上がりなすって……

（駅長の妻、扉を開ける。その部屋に入り、灯をつけ、戻つて来る。ラケーイエフ、部屋に入る。トゥルゲーニエフ、後に続く。）

トゥルゲーニエフ ああ、ああ。（疲れた。全く疲れた。）

（トゥルゲーニエフとラケーイエフの入つた後、扉閉まる。）

駅長の妻 何なの、あの人達。ねえ、何？

駅長 外を見るんじやないぞ、いいか。見たりしてみる、ただじゃおかん。ぶちのめすぞ。珍しいことがあつたもんだ。よつぽどのことなんだな、こんな遠回りをわざわざ……いいか、見るんじやないぞ。連中を軽く見るな。冗談じゃすまされんからな。

駅長の妻 外に何があるうと私の知つたことが……

（駅長退場。駅長の妻、すぐさま窓に駆け寄る。玄関の扉が開いて、パナマリヨーフ登場。用心深く内を窺う。それから部屋に入る。）

パナマリヨーフ 二人は寝たか？

駅長の妻 寝た。

パナマリヨーフ 五カペイカ分、頼む。骨まで凍りそうだ。

（駅長の妻、ウオツカをコップに注ぐ。胡瓜（ピツクルス）を出す。）

パナマリヨーフ（一息に飲み干す。つまみを食べる。両手をこすり合わせる。）もう一杯。

駅長の妻（注ぎながら。）そんなに突つ立ってないで、坐つてあつたまつたらどう？

パナマリヨーフ これでもあつたまれる。

駅長の妻 それで、どこへ行きなさる。

パナマリヨーフ そら来た。聞きたがり屋なんだ、女つて奴は。皆イヴと同じだ。……（飲む。駅長の妻に金を与え、外へ出る。）

（駅長の妻、シヨールを被り、外へ出ようとす。と丁度その時、扉にピトウコーフ登場。ピトウコーフは短い毛皮外套姿。帽子の下に、耳を覆うようにスカーフを縛りつけている。）

ピトウコーフ（二人は）寝たんだな？（溜め息をつき、火に近寄る。）

駅長の妻 凍えなすつたか？

ピトウコーフ 窓から外を見てみればいい。何てことを訊くんだ。（坐る。スカーフを取る。）あんたはこの駅長の女房だね？ すぐ分かつたよ。名前は？

駅長の妻 アーンナ・ピトゥウローヴナ。

ピトゥコーフ そうか。じゃ、アーンナおばさん。一杯頼む。

(駅長の妻 大瓶一本、黒パン、胡瓜(ピツクルス)を出す。)

ピトゥコーフ(飢えたように飲み、食べ、外套を脱ぐ。) 一体何のこった、これは。話にも何もなりやしない。雪道を五十五キロ。その間ずっと鞍の上。縛り付けられていたようなものさ。

駅長の妻 誰だい、あんたを縛り付けたのは。

ピトゥコーフ 運命さ。(飲む。) 寒い。こんな外套じゃ、

まるで役に立たん。それにしてもこんなことになるとは・・・

駅長の妻 ねえ、誰にも言わない。言ったらこの舌がなくなってもいい。ねえ、誰なの、運んでるのは。

ピトゥコーフ お前さんの仕事じゃないよ。お国の仕事だ。

駅長の妻 じゃ、どうしてそんなに慌てているんだい。まるで休みなしじゃないか。そんなじゃ、凍えておっ死(ち)んじゃうよ。

ピトゥコーフ 俺たちなんぞはどうなってもいいからさ。

それに今じゃもうあの人は何も感じないんだからな。(爪先立ちで隣の部屋に続く扉に近づき、耳をすます。) 駢だ。いい気なもんだ。もう起きなきゃならん時間なのに。

駅長の妻 どこへ運ぶんだね。

ピトゥコーフ おいおいおい。俺に口を割らせようつてんだな。言っとくがな、あんた。これはあんたにや、関係ないことだ。こつちの仕事なんだ。(聞。) スヴァートウエ・ゴールイだよ。あの人を埋めたらやっつと休める。休暇に出かけら

れる。あの方は遠いところに旅立って、こちらにはやっつと休める。なんて沢山の詩を覚えたんだ、俺は。くだらない、詩なんて。

駅長の妻 そのぶつぶつの独り言は何？ 訳の分からないことばかり言って・・・

ピトゥコーフ(飲み干して、酔った調子で。) そうだ、詩なんか作って・・・あの詩のせいで皆が心を乱されたんだ・・・書いた本人だって、お上だって、この哀れな俺、キリスト教徒、このピトゥコーフ様だって・・・あの人のことを追い回したんだ、俺は。行くところ、どこへでも・・・でもあの人には運がなかった。何を書いても、どこかちぐはぐ。さつと真ん中に行かなかった・・・

駅長の妻 そのせいなのかい？ その人が罰せられたって言うのは？

ピトゥコーフ な、何だと！ 何を馬鹿なことを言ってるんだ。分かってもいない癖に。

駅長の妻 おやおや、何をそんなに怒るんだね。

ピトゥコーフ 怒らずにおられるか、そんなことを言われ・・・ふん、どつやらあんたは馬鹿じゃなさそつだ。・・・俺はな、言っとくが、あの人に悪意など抱いちゃいけないだ。

これは神かけて言う。人間としてはだ。ただ一つだけ欠点があった。それが詩。詩、詩、詩だ。・・・あの人を追いかけたものだ。あの人馬車に乗っている時でも。その後ろにいる馬車に飛び乗って。あの人には思いもよらなかつたろう。面白かつた。

駅長の妻 だけでももうその人、死んでるんだらう？ それ

なのはまだ追つかけるのかい？

ビトゥコーフ 万一に備えてな。死んだ。．．．あの人は死んだ。するとどうだ。夜にはこの嵐。大騒ぎ。そして俺たちは五十キロの行進だ。五十キロ．．．あの人は死んだ。それで俺はまた心配になってしまふ。あの人を埋めて．．．埋めたつてそれが何の役に立つ。何の意味がある。．．．それで静まる訳がない。また．．．

駅長の妻 お化けなんだよ、その人。きつと。

ビトゥコーフ うん、そうだな。お化けだ。(問) 何だろつ、この痛みは。どこから来るんだ．．．もつ一杯頼む。．．．痛い。血を吸われているようだ。．．．そう簡単には死ねなかつた。なんていう苦しみだ。弾が腹の中に入った儘だつたんだからな。

駅長の妻 あらあら、大変。

ビトゥコーフ あの人は自分の手を噛んで呻き声をこらえた。妻に聞かせないように。それから．．．沈黙。(問) ただそれがどうしたつて言うんだ。俺には何の関係もない。そう、何の関わりもないんだ。俺は奴隷なんだ。普通の人間なんだ。．．．だけど俺はあの人を一人にしておかなかつた。どこへ行くにもついて行つた。一步も離れはしなかつた。決して．．．それがどうしたのだ、あの日は。俺はどこか別のところへ使いに使された。水曜日のことだ。俺はピンときた。一人にする必要があつたんだ。連中は頭がいい。来るべき所には独りで来ると、ちゃんと知つていた。何故か？(それは)あの人の方が来ていたからだ。あの方は真つ直ぐリエーチ力に行つた。連中はもう待つていた。(問) 俺はそこに

いなかつた。(問) ああ、もつあの家に行くことはないな二度と。今はすつかり空つぽ。綺麗さつぱり、誰もいはしない。

駅長の妻 それで、あんたと一緒のあの紳士は？

ビトゥコーフ トウルゲーニエフさんだ。棺の同行者だ。他の人達は誰も許されなかつた。あの人、トウルゲーニエフさんにだけ許可が。

駅長の妻 あのじいさんは？

ビトゥコーフ あの人の侍僕だ。

駅長の妻 何であつたまりに來ない？

ビトゥコーフ 嫌だと言つてな。こつちは無理矢理にでも連れて來ようとしたんだが、駄目だつた。棺を見張つて離れない。あいつに持つて行つてやらなきや。(立ち上がる) ああ、吹雪だ。この詩は本当に最高だ。

「嵐を呼ぶ不吉な雲が低く空を覆つている。

嵐で吹きだまつた雪を、つむじ風が、

今度は丸く集める。

ひゅうひゅう言う、嵐の声。

時には獣のように唸り、また時には、

子供のすすり泣きのように、かほそく泣く。」

耳をすましてみる。本当に子供の泣き声だ。いくらだ、酒は。

駅長の妻 戴けるだけ。(そりや多い方がいいがね。)

ビトゥコーフ (大仰な身振りで、金を机の上に投げる。)

「時には屋根の上の擦り切れた藁を、びゅつと鳴らし、

また時には、遅く到着した旅人のように、

家の窓を叩く。」

( 駅長登場。部屋に続く扉に駆け寄り、扉を叩く。 )

駅長 閣下、出発です。出発の時間です。

( 扉が開き、すぐにラケイイエフ登場。 )

ラケイイエフ 出発だ。

( 幕 )

平成十年（一九九八年）十月二日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「熊美」の項 又は

<http://www.01.246.ne.jp/~nourni/nourni1/default.html>